



SOCIETY & VALUES

SNAPSHOT USA

スナップショット USA





編集長	George Clack
補助編集者	Mark A. Betka Paul Malamud Chandley McDonald Mildred Neely Robin Yeager Mary Ann Gamble Anita N. Green Martin Manning Kathy Spiegel Tim Brown Ann Monroe Jacobs
グラフィック・デザイン	
フォトリサーチャー	
発行人	Judith S. Siegel
編集主幹	Richard W. Huckaby
制作	Christian Larson
制作補佐	Chloe D. Ellis
編集委員	Alexander C. Feldman Jeremy F. Curtin Kathleen R. Davis Kara Galles

表紙:Courtesy of Comstock Images: Jupiter Images

編集・発行:米国大使館レファレンス資料室
(2008年9月初版、2012年1月第3版)
本号の日本語文書は参考のための仮訳であり、正文は英文です。

米国国務省の国際情報プログラム局は、eJournal USAのロゴ名で電子ジャーナルを発行し、米国や国際社会が直面する主要な問題、ならびに米国の社会や価値観、考え方、さまざまな制度について検証しています。

最新号はまず英語で発行され、続いてフランス語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語版が発行されます。必要に応じてアラビア語、中国語、ペルシア語の翻訳版が発行される場合もあります。ジャーナルはそれぞれ、発行巻数(出版された年の番号)と、号数(1年間に発行された各号の番号)別に目録に掲載されます。

ジャーナルの中で提示された意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。米国国務省は、ジャーナルがリンクするインターネット・サイトの内容、およびこれらのサイトへの継続的な利用の可能性について、一切の責任を負いません。各サイトについての責任は、サイトの発行者のみに帰属するものとします。ジャーナルに掲載される記事や写真、イラストは、著作権についての明記がない限り、米国外での複製や翻訳を認めますが、明記があるものについては、ジャーナルに記載されている著作権保有者の許可を得なければなりません。

ジャーナルに関するご意見等は、最寄りの米国大使館・アメリカンセンターのレファレンス資料室、または下記の編集部までお寄せください。

Editor, eJournal USA
IIP/PUBJ
U.S. Department of State
2200 C Street, NW
Washington, DC 20522-0501
USA
E-mail: eJournalUSA@state.gov

本号について

グーグルに「United States」と入力して検索すれば、コンピュータ画面には33億7,000万件の項目がリストアップされる。米国に関して公開されているコンテンツには不自由しないことは明らかだ。しかし、「EジャーナルUSA」編集部は本号の準備を進めていくうち、米国の外からやって来る若い世代に合わせた新しい刊行物があれば、すき間を埋められるのではないかと気がついた。「スナップショットUSA」という本号のタイトルもそうしたアプローチを反映している。編集部としては、基礎的な情報を提供した上で、それをさらに詳しく展開し、米国人が自分の国や世界をどう考えているかについて簡単に触れ、現在の米国人のイメージを伝えたいと思っている。

われわれの目標は、米国で最も人口の多い州はカリフォルニア、といった情報だけではなく、米国の民主主義が「抑制と均衡」のシステムの上に成り立っていることや、大人の世界へ乗り出そうとしている若者たちが抱くさまざまな感情は米国でもどこでもあまり変わらないのではないかといったことを、世界中の読者に知ってもらうことだ。要するに、Eジャーナル2006年6月号の「スナップショットUSA」は学術論文ではなく、米国の現在を興味深い断面で切り取った、言葉と写真のコラージュなのである。

まずはショート・エッセイを集めた「わたしの米国」から読んでほしい。編集部は、若い5人に執筆を依頼し、この国について海外の読者に知ってもらいたいこと、つまり、新聞やテレビで毎日大きく報道されるニュースに押し流されて見過ごされがちな、米国のさまざまな側面について書いてもらった。彼らの考えていることを読むと、意外な発見があるかもしれない。

「米国人を米国人としているいくつかのこと」では、ノースウェスタン大学の政治学者ケネス・ジャンダKenneth Jandaが、米国の民主主義の重要なカギは多元主義であると指摘する。アメリカン大学(ワシントン)からは国際関係論を専門と

する研究者ゲーリー・ウィーバーGary Weaverがさらに突っ込んだ説明を加え、米国は人種や文化が入り交じてアイデンティを失った「るっぽ」にたとえられることが多いが、その比喩は正確ではないと主張する。ウィーバーはむしろ、それぞれ異なる部分を尊重しながら全体として大きな1つのまとまりとなっている社会という意味で、タペストリーかモザイクで象徴する方を選ぶ。そしてこのセクションの最後を飾るのは、現代に生きる5人の米国人のポートレイト。彼らの人生は、例えば自己信頼、起業家精神、慈善活動、セカンド・チャンス、自分の夢の追求など、この国と深く結びついている伝統的価値観を体現しているようだ。

「米国のイコン」では、政治家、公民権運動指導者、科学者、起業家、スポーツ選手、芸能人など32人を紹介する。彼らの成し遂げた業績は、国内だけでなく世界の多くの人に影響を与えており、どの国にしろ1つの国を理解するためには、ある程度その国の過去を理解する必要がある。そこで、米国史上の重要な事件の年表を付け加えた。

続いて、米国の各地域をめぐる短い旅に出る。ここでざっとこの国を概観しておくのがよいと思われるは、最も初期の、そして最も長く続いたアメリカン・ドリームの1つが、まさに広大な土地そのものと関係があつたからだ。ウォルト・ホイットマンはこうした考え方を、1855年の詩集『草の葉』の序文で述べている。ホイットマンは書いている一米国の眞の詩人は「その地理と自然の生命と川と湖とに肉体を与える……長い大西洋岸がもっと長く伸び、太平洋の沿岸がもっと長く伸びるとき……彼はまたそれらを東から西まで1つにつなぎ、その間にあるものを映し出す」



自由の女神像

Courtesy of Comstock Images; Jupiter Images

編集部



スナップショット USA

米国国務省 2006年6月 第11巻第2号

<http://www.america.gov/publications/ejournalusa/0606.html>

目 次

わたしの米国

5人の若い米国人が、米国について世界の読者に知ってほしいことを書いている

5 線からはみ出して色を塗る

ジャクリーン・モーレイス・イーズリーが米国の家族の多様性について述べる

7 ある空軍兵の話

元軍人のコーリー・ロンドンは、ブラック・アメリカンであることと、祖国を守ることについて語る

8 都会と夢

アシュリー・ムーアは大学を卒業したばかりの新社会人。アメリカンドリームの自分なりの理解を語る

9 新しい世界

エブー・パテルはシカゴの「インターフェイス・ユース・コア」理事。米国のイスラム教徒としての生き方を洞察する

10 米国の意味

ケリー・マクワイアムズは前途有望な大学1年生。小説も出版している。彼女なりの米国のビジョンを説明する

11 補足 数字で見る米国人

米国人を米国人としているいくつかのこと

12 多元主義と民主主義

ケネス・ジャンダ ノースウェスタン大学(イリノイ州シカゴ)政治学教授

第一線で活躍する研究者が、多元主義がいかに米国の民主主義にとって重要なカギであるかを説明する

16 補足 米国Q&A

18 米国の文化的タペストリー

ゲーリー・ウィーバー アメリカン大学(ワシントンDC)国際関係大学院教授

著名な研究者が米国文化のいくつかの側面と、さまざまな少数民族グループが米国社会で共に働く姿を描く

21 やる気あふれる5人

今の時代にあってさまざまな米国の伝統的価値観を体現している米国人5人のプロフィール

24 補足 米国ミニ知識

有名な人物、有名な場所

25 米国のイコン

「イコン」と呼ばれるにふさわしい業績を成し遂げた政治家、公民権運動指導者、科学者、起業家、スポーツ選手、芸能人など32人を、写真と簡単な説明で紹介する

36 補足 米国史の画期的事件

38 米国の簡単ガイドツアー

米国には50の州があり、それぞれに独自の文化がある。ここでは米国を地域ごとに概観する

57 補足 移住者が米国について思うこと

58 補足 米国の知識人が語る価値

59 参考資料

米国に関するウェブサイト

わたしの米国

米

国人であるということはどういうことか。その定義について、米国人の間では建国まもないころから議論されてきた。しかし、内側を見つめようとするそうした努力は、自然に外へと向かっていき、世界の国々を一種の対話の中に引き入れることが多いものだ。例えば、ラルフ・ウォルド・エマソンは1841年の有名なエッセイ『自己信頼』の中で、この長所を、過去(とりわけヨーロッパの過去)に抵抗する形で定義している。「あなた自身を強く主張しなさい」とエマソンは述べている。「まねをしてはならない」と。

「わたしの米国」というセクションに掲載するエッセイでも、それと同じような精神を見ることができる。ここでは、背景も職業も結婚歴の有無もさまざまな5人の若い執筆者を全米各地から選び、世界の同世代の人たちに向けて、この国についてこれはぜひとも語りたいと思うことを書いてもらった。これらのエッセイの方が、ハリウッド映画やテレビの国際ニュースを通すより、米国や米国民のイメージを深く豊かに伝えてくれるだろう。

エッセイの多くは、まず内へ目を向け、それから世界を考える方へ移っていく。ジャクリーン・モーレイス・イーズリーは帰化した米国市民だが、自分が住む地域の家族の多様さに驚嘆している。元軍人のコーリー・ロンドンは、なぜこの国を守ることが大切なのかを語る。大学卒業後、就職のために故郷のテキサスを離れたニューヨークの雑誌編集者アシュリー・ムーアは、狭いアパートと空っぽの冷蔵庫がいかにアメリカン・ドリームとかけ離れているかに思いを巡らす。シカゴにある異なる宗教間の協議会でイスラム教徒代表を務めるエブー・パテルは、なぜイスラム教と寛容を重んじる米国の伝統とが互いに補強し合うと思うか、を語る。

大学1年生のケリー・マクワイリアムズは、他の執筆者が「米国の歴史の悲劇的かつ恐ろしい部分」と表現している中身について十分知っており、その上で常に自己修正するこの国に住もうと思った動機を説明する。そして自分の見習うべき手本として、米国の奴隸廃止運動の指導者となった奴隸出身のフレデリック・ダグラスを挙げ、ダグラスは米国にとどまり世界的規模の奴隸廃止運動を展開しようと決心したと指摘する。18歳の彼女は「米国は、国民に合うように国をつくり、それをまたつくり変えることができる」と書く。「米国にはそのつもりがある。それを待っている。そしてそれが真実であり続けるかぎり、わたしは米国人でいるだろう」と。

わたしの米国——線からはみ出して色を塗る

ジャクリーン・モーレイス・イーズリー

ジャクリーン・モーレイス・イーズリーはメリーランド州コロンビアに夫と2人の娘と住んでいる。フリーランス・ライター。



Courtesy of Jacqueline Morris Easley

自宅の裏庭で。ジャクリーン・モーレイス・イーズリーとその家族

赤ワインを好む。もうMTVも見ない。けれども、1つだけ変わらないことがある。それは相変わらず米国の熱狂的ファンだということだ。

わたしが米国の市民権を獲得したのは5年前、最初の子供を身ごもったときだ。当時のわたしは、大学時代の恋人と結婚して、短期間シカゴに住んだあと、メリーランドに腰を落ち着けようとしていた。

最近では、奔放でかわいくて反抗的な2人の幼い娘を育てるのに精いっぱい努力しながら、米国で子供を育てられることを神に感謝している。そして今でも市民権証書をもらったあの日のことをよく思い出す——わたしは胸に手を当てて忠誠を誓いながら、おなかを蹴る赤ん坊の存在と、正式に米国人になったという言いようのない誇らしさとを、同時に感じていた。

それから5年、娘たちの前途には無限の可能性が広がっている。わたしの娘たちが快適で恵まれた生活を送っていることはよくわかっている。それは夫とわたしが、そしてわたしたちより前にはそれぞれの両親が、懸命に働いてきたからだということもあるが、それと同時にまったくの幸運によるものだということも確かだ。わたしと夫は、人生に幸運をもたらすクジを引いた。わたしたちは2人とも愛情豊かな両親のもとに生まれ、家族のきずなと、教育、勤勉、他人への貢献の大切さを教えられた。それと同じ価値観が、今ではわたしたちの小さな家族のバックボーンとなり、わたしたちを未来へ前進させる力となっている。

わたしたち夫婦は、自分たちがどんなに恵まれているかということを、少しでも理解できるように子供を育てようと心掛けている。娘たちには、自分の持てる才能や資質を見分け、ほかの人たちの向上のためにそれを役立てるようベストを尽くしなさいと教えている。わたしたちの生活には、おいしい食べ物やたくさんの娯楽があるけれど、そこにはまた、チャリティ活動や地域サービス、異なる文化や生活様式についての子供向けの本、寛容や多様性や思いやりについての長々と続く母親のお説教もあるふれている。

アメリカン・ドリームはとても手の届かない陳腐な幻想というわけではない、とわたしは思っている。わたしの家族の中だけでなく、日常的に自分の夢を追って努力している友人や隣人、そして直接には知らない人たちの中にも、そうした例を見ているからだ。わたしにとって米国の家族の顔には、前に述べたように、きちんと刈り込まれた芝生の上にいる金髪で白い肌の健康的な両親と2.5人の子供たちも含まれはするが、わたしの個人的な知り合いに限って見れば、ほかにもたくさんの異なる顔が存在する。

みなさんの目には、現代の米国人家族の顔がどんなふうに映っているのだろう？ 背が高くて元気のいい、金髪で色白の両親と子供が2.5人の家族、というイメージなのだろうか。ひょっとしてその家族は小ぎれいな家の前に立っていて、家の前にはきちんと刈り込まれた芝生があって、白い柵に囲まれているとか？ 家の中に入ると、キッチンのカウンターにはマクドナルドの袋、冷蔵庫にはコカコーラ、そしてどこかでMTVが流れている。

確かに、それも米国の家族の1つの典型には違いない。そして1985年のフィリピンに住む11歳の少女だったわたしも、まさにそれと同じイメージを描いていた。ある日、アジア開発銀行に勤める父が仕事から帰宅して、米国に引っ越すことになったと告げたとき、わたしはびっくりして言葉も出てこなかったが、しばらくするとうれしくてわくわくしたものだった。

おかしいことに、当時のわたしにとっては、マクドナルド、コカコーラ、MTVだけが、米国の大切なパートだった。この3つのシンボルが、何かをたくさん手に入れられるしるしだとすれば、米国はきっと素晴らしい国に違いない！

わたしは家族と米国に引っ越しした。そして20年たった今も、こうして米国にいる——前よりちょっと無邪気さを失い、少しほはメディアの広告というものがわかるようになった今は、フィレオ・フィッシュよりスシ、コカコーラより上質の

娘がかよっているコープ・プレスクールにもいろいろな家族の顔がある。アフリカ系米国人の夫と素晴らしい子供たちのいる、赤い髪をした小柄なアイルランド系の女性。3人の子供を育てている2人の女性たち。2つの仕事をかけもちしながら1人で家族を養っているシングル・マザー。さらにわたしの住んでいる一画には、ほかにもさまざまな顔がある。米国人の女性と結婚して2人の子供に恵まれたイラク人の男性。うちに来てくれるベビーシッターは、お父さんがイタリア人でお母さんがイラン人だ。韓国人の精神分析医の夫婦もいる。少なくともわたしのまわりでは、多様性はきわめて豊かで、至る所で見受けられる。

わたしは200年以上前に起こった最初の反乱を思い出さずにはいられない。あれこそ、未来の「移民の国」の独立精神をがっちり地固めてくれた戦いだった。あの独立精神の下に、数百万、数千万の移民が、不寛容や偏見や迫害から逃れる避難所を求めてこの国にやって来たのだ——自由にあこがれ、本当に自分のものといえる正真正銘の人生を送る権利を手に入れたいと願って。

わたしは、若い米国史のところどころに影を落としている悲劇的な要素について考えると、うんざりすることもある。でも、国にしろ文化や宗教にしろ、あるいは個人にしろ、よい部分とともに悪い部分がまったくないという例があったら教えてほしい。もちろん、この国について腹が立ったり、恥ずかしくなったり、幻滅したりすることははある。でもそれは、人生に喜びをもたらしてくれるものについても言えることだ——例えば結婚や子育て、仕事のキャリア、家族や親戚、友情などについても。

結局、米国には悲しい思いをさせられることもあるが、驚嘆させられることの方がはるかに多い。歴史の浅いこの国がいかに短期間に多くのことを成し遂げてきたか、いかに世界の民主主義と人権を守るために戦っているか、いかに経済大国としての地位を築き上げてきたか、そして海外の困っている人たちにお金を援助しているながら、いまだに「もっと大きく、もっと幸せをもたらす、もっと明るい」理念を夢中になって追い続けているか。

わたしは、米国というとよく連想されるある種の皮相な価値観には疑問を持っているので、娘たちができるだけそういうものに染まらないように気を配る一方、独立心や多様性、表現の自由といった、この国ではまだまだ健在の素晴らしい価値観についてはとても大事にしている。そしてこれらの価値観が、米国の親として子供を育てるわたしと夫にとって、複雑に入り組んだその道を照らしてくれる光になることは間違いない。

米国人は個人を称賛する。そのためこの国には、本当にユニークな人、とっぴな人、まれに見る才能を持っている人、極端に頑固な人、ひときわ意欲的な人、多芸多才な人であふれている。個性のはっきりしているわたしの娘たちは、女の子らしい女の子、元気のいいおてんば、本の虫、芸術家の卵、思いやりのある国際人と、いろいろな面を併せ持っている。もちろん、わたしはこのすべての面を——まだ発見されていない面も含めて——できるだけ褒めてやる。

米国人はまた、自己分析行動を高く評価する。つまり自分を発見し、自分を覆っている皮をむいて、本当の自分の真髄を見つけ、何事も一度は試してみる、ということだ。そういう自己分析行動はちょっと甘いのではないかという人もいるかもしれない。でも、わたしは5歳の娘が塗り絵の線をはみ出して色を塗っても、それを直させようとはしない。むしろ、すぐにはルールに従わない娘を誇らしく思う気持ちが湧いてくる。娘が、ちょっと乱雑で自由奔放な、進歩する可能性のある方を好んで、境界線を無視したのは、素晴らしいことだと思う。

もちろん、たかが塗り絵にすぎない。でも、わたしが言いたいのは、米国人がベストを求めて一生懸命努力しているとき、それは単に競争好きだからというのではなく、いつも反抗し、境界線を押し広げ、危険を冒しているからだということだ。そしてわたしたちがそうするのは、わたしたちの住む国の人々とそれが意味するすべてのものに、そうするように励まされるからだ。

わたしたちは、引っ越し案でいてもいいし、外向的でいてもいい。賢い人間であってもいいし、思慮のない人間であってもいい。スタイルッシュでいても、だらしなくしていてもいい。古風であっても前衛的であっても、その人の自由である。そうしたいなら、他人にどう思われるかを心配して、ほかの人たちに合わせ、期待に添うように生きてもいい。あるいは、誰かに見られていることなどあまり気にせず、屋根の上に立って叫んだり、騒ぎを起こして人を怒らせたり、現状を脅かすこともできる。わたしは娘たちが何をしようとするのか、今から楽しみにしている。娘たちが自己表現と称して身に着けるものに、たじろぐこともあるかもしれない。しかし、今のところは、線をはみ出して色を塗っても、そのままにしておこう——できたら、線をはみ出して塗ったことを褒めてやろう。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

わたしの米国——ある空軍兵の話

コーリー・ロンドン

コーリー・ロンドンは元米国空軍兵。最近、オーガスタ・カレッジ(ジョージア州オーガスタ)を卒業。現在はオーガスタにあるペイン・カレッジの広報部次長。



Courtesy of Cory London

1 900年代の初め、大部分はヨーロッパの国から、よりよい生活を求めて米国に來たいと望んだ人々のことを、小学校の歴史の授業で教師が話してくれたのを覚えている。船の切符を買って米国へ渡ることのできた人は移民と呼ばれた。米国はチャンスの国で、道に黄金が敷き詰められているとうわさされていた。

ぼくはそんな道路に出会ったことはないが、チャンスということなら、それを利用しようという気さえあれば、この国にはたくさんのチャンスが転がっている。

やはり歴史の授業で覚えていることは、アフリカの西海岸で捕らえられた人々が、奴隸貿易によって米国や南米の国々、カリブ海の島々に送られたという話だ。これらのアフリカ人たちが新世界へ渡る長い船旅で経験した劣悪な環境についても聞いた。また、米国で奴隸制度が廃止されるまでアフリカ人が耐え抜いた虐待の話も聞いた。そんな困難な時代を、どうやって耐えることができるのだろうと不思議だった。でも、彼らは耐えて生き延びたのだ。ときどき、自分の黒い肌を見ながら、ぼくがそんな状況に置かれたたら耐えられただろうかと思うことがある。そして、祖先が耐えてきた苦難を経験しないですんだことを、神に感謝する。

というわけで、ぼくが米国を思うとき、頭に浮かぶのはたいてい、よりよい生活を送るチャンスを求めて米国に渡ってきた昔の人々や、奴隸として連れてこられてよりよい日々が到来するまで耐え抜いた人々だ。どちらにしても、彼らは困難を克服しながら、あとに続く世代にもっといいチャンスが訪れたらそれを利用できるようにしようと頑張った。

「米国人とは何か?」という質問は、ちょっと厄介な問題だ。というのは、ネイティブ・アメリカンを除いて、みんな米國の外からやって来たわけだし、少なくともわれわれの祖先はそうだったから。

ぼくの家族もまったく同じだ。両親はカリブ海に浮かぶ西インド諸島の小さな島からやって来た。母はグアドループ島、父はセント・マーティン島の出身だ。2人は10代のときセント・マーティン島で出会った。その後、1960年代後半に別々に米国へ渡った。母はニューヨークに落ち着いてから、父がすでにニューヨークで暮らしていることを知った。そしてどうにか父を探し出した。あの話は言うまでもないだろう。

やがて、父は米国陸軍に入隊し、20年間軍務に服した。父が軍隊にいたおかげで、ぼくたち家族はかなり快適な生活を送ることができ、そうでなければぶん行けなかつたような世界のいろいろな場所に行つた。兄はぼくがまだ高校生のときに空軍に入り、ぼくも大学で1年過ごしたあと空軍に入隊した。

現在、ぼくは軍隊をやめ、大学での学業をもう少しで終えるところだ。大学教育の費用は軍が払ってくれる。今ぼくが身に着つつある教育のほかにも、空軍に入って国のために尽くす仕事に就いてよかったですと思われる思い出がいくつかある。

空軍の中でも理想的な職場で働くことのできたぼくは幸運だった。基地の新聞を編集する広報業務部門の仕事に就くことができたのだ。この仕事のおかげで、米国の安全を確実なものにするために空軍兵たちがどんな活動をしているかがわかり、また困っている人々の役に立っていることもわかった。

中でも忘れられない思い出は、アラスカのアンカレッジから来たメディアが、アラスカ先住民に発電機などの補給物資を空輸する飛行部隊を取材するのに同行して、北極圏の小さな村を訪れた体験だ。物資の空輸は毎年恒例の行事で、クリスマスの数週間前に行われた。この日のハイライトは、物資を受け取る村人たちの喜ぶ顔が見られたときだ。アラスカ先住民の村への援助は、空輸に携わる空軍兵たちの典型的な日常業務であり、彼らは、清廉潔白を第一に、自分より人のために尽すこと、そして活動のすべてにおいて卓越していること、という空軍の核となる価値観を実践していたのだ。

だから、陸軍であれ海軍であれ空軍であれ、米国兵がイラクで殺されたというニュースを見たり読んだりするのはつらい。ぼくは自分を愛国者だと思っているし、自分の国に奉仕し国を守るために軍隊に参加したのだが、入隊した一番大きな理由は、海外へ行って人を殺すことではない。ぼくは自分を教育する費用を稼ぎ、軍隊を出てから仕事に就くための訓練を受け

たかった。ぼくが空軍で出会った多くの兵士も、入隊した理由をそう話していた。命を失った軍人のニュースを見ると、遺体袋に入って帰国したのは自分だったかもしれないと思う。しかしそれは、将来の世代が9.11のような惨事を二度と経験しなくてすむよう、今の新しい世代の軍人たちが払った犠牲の一部なのだ。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

わたしの米国——都会と夢

アシュリー・ムーア

アシュリー・ムーアは最近テキサス・クリスチャン大学(テキサス州フォートワース)を卒業。現在は、ニューヨークの出版社コンデナスト社のウェブ事業部門、Brides.com Local Printで働いているが、いつかテキサスに戻りたいと思っている。



Courtesy of Ashley Moore

わたしたちは子供のころ、アメリカン・ドリームについて教わった。「米国はチャンスの国です」と教師は言ったものだ。「この素晴らしい国の果実は、一生懸命働いて、意志を強く持てば、手に入れることができます」。教室の中で目を輝かせて座っていた生徒たちは、歴史の教科書をのぞき込み、幸運な人生を求めて米国にやって来た人々の写真をじっと見つめた。20世紀の初めに満員の船に乗って到着した大勢の移民にとって、よりよい生活とは、安定した仕事やテーブルの上の食べ物、家族を養う能力を意味した。教科書を読んでいくうち、わたしたちは幸運の秘密を学んだ。つまり、働きづめの1日が終わったら、例えばテーブルの上の食べ物とか銀行預金とか、その成果を示す何かがあれば、その人は生活の中にその夢を実践しているということなのだ。

もちろん、夢の挫折もあった——それもたくさん。わたしたちが成長して勉強が進むにつれて、教科書には、アメリカン・ドリームを追いかけた人々が不運に見舞われたという話も載るようになった。困難な時代になるのは経済的要因が多いのだが、人種問題が原因のことでもあった。しかしそうした混乱にもかかわらず、夢は生き続けた。年を追うごとにますます加速しながら、夢はいつも人々を奮い立たせた。そして今でもまだ、わたしたちの誰もが、この国で自分なりの成功を収めるという考えに夢中になっている。

わたしが学校で教科書をのぞき込んでいたときからすでに数年たつ。歴史の授業について考えていたころからはもっと長い時間が過ぎた。けれども最近、わたし自身の夢という考えとたわむれながら、あのころのことに思いを巡らせており。わたしは今、ニューヨークの一角に住んでいる。そこは100年前の移民たちが幸せな生活を求めて血と涙を流した場所から数ブロックしか離れていない。若く野心的なライターとして、わたしも血こそ流さないものの涙を流すことはある。わたしはこの街の初期の移民と同類なのかもしれない。なぜなら、ここであきらめたり、中止したり、膝を屈したりはできそうもないから。

毎日、わたしは街なかへ乗り込んでいく。そこは暗く醜く、いろいろな誘惑や邪魔なものがうごめいている。しかも今は冬ですらない。でも、昼間は雑誌の記事を書く仕事で長時間過ごし、夜はエートレスの仕事をすませたあと、1日の終わりに、わたしの夢は絶えず語りかけてくる。いつかこの努力に見合うものを手に入れるときが来るわよ、と。でも、何を? とわたしは自問する。実家のリビングほどの広さしかないワンルームのアパートを? それとも、ほかには何も入っていない冷蔵庫の中でガビガビになったチーズの塊を?

「米国はチャンスの国です」と教師は繰り返しわたしに言ったものだ。「この素晴らしい国の果実は、一生懸命働いて、意志を強く持てば、手に入れることができます」。その授業を受けていたときの天真爛漫さ。子供のころ、わたしたちは何でも信じ、信じるなと言われるまで信じ続けた。その真髄において、アメリカン・ドリームも子供のように天真爛漫なのだ。わたしたちは年を取るにつれ、ときには幸運などには巡り合えないのではないかと不安になりながら、相変わらず冷淡な夢を、まだあきらめずに抱き続ける。

わたしの成功には高級車やペントハウスは入っていないのかもしれない。作家にもなれないかもしれない——これは認めなければならない。それでも、夢はわたしを励まし続ける。だから、いつかきっと、自分なりの成功を収めるだろうと信じている。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

わたしの米国——新しい世界

エブー・パテル

エブー・パテルは、イリノイ州シカゴの「インターフェイス・ユース・コア」理事。異宗教間の協働運動のリーダーとして活躍している。



Courtesy of Eboo Patel

わたくしが米国を愛しているのは、米国は完璧だと幻想を抱いているからではなく、米国がわたしに——インドから来たイスラム教徒の移民の子供であるわたしに——その発展に参加し、その約束の中に自分の持ち場を見つけ、その可能性の中に役割を果たすことを認めてくれるからだ。

ヨーロッパから米国に最も早く入植した植民者の1人であるジョン・ウィンスロップは、こうした可能性の真価をはっきりと言葉にあらわした。自分たちの社会は「丘の上の町」、世界の目印となるだろうと同胞に告げたのだ。それはウィンスロップのキリスト教信仰に根ざした希望であり、彼の頭の中には、中央に尖塔のそびえる丘の町があったに違いない。その後数世紀にわたって、米国はきわめて信仰の厚い国としてあり続けてきたが、一方、それと同時に驚くほどの複合社会にもなった。確かに、わたしたちは欧米で最も信心深い国民であり、世界で最も多彩な

宗教が共存する国に住んでいる。丘の上の町の中心に建っていた尖塔は、今や、イスラム教のモスクのミナレットや、ユダヤ教のシナゴーグのヘブライ語や、仏教の修行僧の読経の声や、ヒンズー教の彫像に囲まれている。実際、今の米国では、「建国の父たち」の多くが信徒だった米国聖公会の会員より、イスラム教徒の方が多いのだ。

100年前、W・E・B・デュボイスは、20世紀は皮膚の色による差別が課題となるだろうと警告した。21世紀はそれとは違う差別、すなわち宗教による差別が幅をきかせるかもしれない。北アイルランドから南アジアまで、中東から米国中西部に至るまで、人々は神の名において糾弾し、威圧し、殺している。わたしの国(米国)とわたしの宗教(イスラム教)と神を信じるすべての人々にとって最も急を要する問題をまとめれば、次のようになるかもしれない——天国について異なる考えを持つ人々が、どのように地上で交流していくか? 教会の尖塔もモスクのミナレットも、ユダヤ教のシナゴーグもヒンズー寺院も、仏教の修行僧も、みんな新しい丘の上の町で場所を分け合って共存していけないものなのか?

わたしは、米国のエトス——寛容と敬虔が混ざり合った気風——には何か特別なものがあり、この問題に貢献できるかもしれないと思っている。

米国は、大多数は米國の外からやって來た「魂」の巨大な集まりである。米国の特質は、これらの魂がそれぞれの持ち味を米国の伝統にささげ、米国の歌に新しい音色を加えることができるにある。

わたしはイスラム教徒の魂を持った米国人である。わたしの魂には、神の意思に従おうと努めた英雄や運動、文明の長い歴史が記憶されている。預言者ムハンマドがイスラムの最も重要なメッセージ(タザーカとタウヒード——前者は情け深い正義、後者は神の唯一性)を伝えたとき、わたしの魂はそれに耳を傾けていた。中世の時代には、わたしの魂は東西へ広がり、カイロやバグダッドやコルドバなど、イスラム教の大都市のモスクで祈り、図書館で勉強した。わたしの魂はペルシアの詩人ルーミーと共にぐるぐる旋回し、アベロエスと共にアリストテレスを読み、ペルシア王ホスローと共に中央アジアを旅した。植民地時代には、わたしのイスラム教徒の魂が正義に目覚めた。そしてインド解放のためのサティヤーガラハ(非暴力不服従運動)に参加して、アンドゥル・ガッファール・ハーンやフダイ・フィドマットガル(神のしもべたち)と共に行進した。わたしの魂は、ファリド・イサク、エブラヒム・ムーサ、ラヒード・オマールと、多文化社会を目指す南アフリカのために奮闘している「ムスリム青年運動」を支持していた。

わたしは片方の目で、昔からあるこうしたイスラム教の多元主義に対するビジョンを持ち、もう一方の目で、「米国の約束」を実践する。そして心の中では、異なる宗教が互いを尊重して場所を分かち合い、全体として共通の利益に奉仕するような「丘の上の町」を想像し、その可能性が現実のものとなることを祈る。さまざまな国家や国民が友愛と公正の精神をもって互いを知るようになる世界、普通の生活が一緒にできる世紀になることを。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

わたしの米国——米国の意味

ケリー・マクワイリアムズ

ケリー・マクワイリアムズはカリフォルニア州ロサンゼルスとアリゾナ州フェニックスで育ち、その後マサチューセッツ州にある「ウォルナッヒル・スクール・フォー・ジ・アーツ」に入学。2004年には、ヤングアダルト向けに書いた初めての小説Doormatを発表。来年ロードアイランド州プロビデンスのブラウン大学に入学する。大学では文学の勉強を続ける予定。



Courtesy of Kelly McWilliams

わたしは大陸を横断してボストンにやって来たカリフォルニア・ベイビーだ。ここ東海岸では、風景も家も、わたしが知っていたものとはすべてが文化的にまるで違う。それでも、ここも米国だと知っている。わたしはよく、最初に住んだ家と新しい家の間に横たわる3,000マイルを想像する。信じがたいほどの広さ、野原や畑、西部の町々、山々、鉱山、金持ちの家、貧しい家、何千万もの異なる声、異なる言語。そして、それもすべて米国なのだと知っている。

米国って何だろう？わたし自身はそれを故国(ホーム)と呼ぶけれど、みんなにとつてそうとはかぎらないこともわかっている。わたしの先祖にとってさえ、必ずしも故国(ホーム)ではなかった。わたしは黒人と白人の血が混じったムラートだから、米国が金のように叩いたり延ばしたりして鍛えられる国で、もし言葉をしっかり強く打ち込むことができれば、わたしたち自身の国がつくれるということを知っている。有名な奴隸廃止論者で逃亡奴隸だったフレデリック・ダグラスは、わたしの好きな作家でもあるが、彼はこの国を、最初は自分を閉じ込める牢獄だった場所から故国(ホーム)へと、言葉を使ってつくり変えた。ここでは言葉が力を持っていて、わたしたちの憲法は言葉を抑圧してはいけないと要求しているから、わたしは言葉を書く。わたしは作家だ。わたしは米国人だ。

すでにわたしは砂の上に、名前の代わりにXという字を書き、どんなに欠点のある土地だろうと、わたしの骨がちりになるまで徹底的にこの土地をつくっていくという決意を刻印してきた。歴史はわたしたちに、国が真理をもたらすように努力せよ、と合図を送ってくる。人間がそれをよりどころにして生存している真理、すなわち自由、機会、そして自分たちの国が間違ったことをしたときにその不当行為と戦う権利を。わたしは市民がちゃんと耳をすまして気をつけているかぎり、米国については心配ないと思っている。

最近わたしが疑問に思っているのは、米国人は不正行為に対してなぜもっと声をあげないのかということだ。たとえいつきではあっても、なぜ沈黙してしまうのか。でも、いつも土の中でゴロゴロと音が鳴りだし、新聞は新しい課題を取り上げて紙面に載せ、わたしたちは歴史における自分の役割に応え始める。今この時点では、心ある人々は、わたしたちが海外で陥った不当行為にはっきりと反対の声を挙げ始めている。グアンタナモ・ベイは国家の暗い一時期としてわたしたちに汚点を残すだろう。わたし個人としては信用できない国際政策が、わたしの楽観主義に挑戦状を突きつける。でもわたしは、この國の人々は想像力豊かな詩人であることを思い出す。そういう国民なのだから、この国がいつも悪夢から覚めるよう気をつけていくだろう。

フレデリック・ダグラスは、米国を変えるのは国民のためだけでない、自分が米国を愛しているからだと書いた。彼は多くの逃亡奴隸のようにカナダへは行かなかった。東海岸のボストンの近く、わたしが今住んでいる所の近くに踏みとどまり、そこから旅をしながら、種をまくように自分の書いた言葉を広め、それを根付かせた。わたしは若くて頼りにならないかもしれないけれど、彼を見習って、米国は国民に合うように国をつくり、それをまたつくり変えることもできる国だと心から信じている。米国にはそのつもりがある。それを探っている。そしてそれが真実であり続けるかぎり、わたしは米国人でいるだろう。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

数字で見る米国人

Statistical Abstract of the United States
<http://www.census.gov/compendia/statab/>

人口 (2006年6月6日推定 http://www.census.gov)	298,346,797
人口 (2004年推定)	293,655,404
18歳以下 (2004年推定)	25%
65歳以上 (2004年推定)	12.4%
女性 (2004年推定)	50.8%
白人 (2004年推定)	80.4%
黒人またはアフリカ系米国人 (2004年推定)	12.8%
アメリカインディアンまたはアラスカ先住民 (2004年推定)	1.0%
アジア系 (2004年推定)	4.2%
ハワイ先住民と他の太平洋諸島系住民 (2004年推定)	0.2%
2種類以上の人種を申告した人 (2004年推定)	1.5%
ヒスパニックとラテン系を除く白人 (2004年推定)	67.4%
ヒスパニックまたはラテン系 (2004年推定)	14.1%
家庭で英語以外の言語を話す人 (2003年)	18.4%
高卒 (2004年、25歳以上の人の比率)	85%
学士以上の学歴を持つ人 (2004年、25歳以上の人の比率)	28%
障害のある人 (2004年4月14日現在、5歳以上)	12.5%
持ち家率 (2004年)	69%
1世帯の人数 (2004年)	2.57
貧困レベルの人 (2003年)	12.5%
合法的移民の数 (2004年)	946,000
違法移民の数 (2004年推定)	7,000,000
外国生まれの人 (2003年)	11.9%
居住地を変更した人 (2003年-2004年)	13.3%

- ・最も人口の多い州 (2004年)——カリフォルニア州 35,894,000人
- ・最も人口の少ない州 (2004年)——ワイオミング州 507,000人
- ・2000年から2004年までの人口増が最も大きかった州——ネバダ州 16.8%増
- ・都市人口の最も多い州——ニュージャージー州
- ・最大都市圏——ニューヨーク市・ニュージャージー 18,710,000人
- ・外国生まれの居住者の最も多い都市——カリフォルニア州サンノゼ市 40.5%

多元主義と民主主義

ケネス・ジャンダ

ケネス・ジャンダはノースウェスタン大学(イリノイ州シカゴ)政治学教授。

ほのかの民主主義国家と比べて、米国政府の構造はきわめて分権的である。合衆国憲法の起草者たちは、権力が1つの政治機構に集中することを極端に警戒し、政府の異なる部門や地位に、権限を意識的に分散しようとした。米国型の分権システムは、徹底した「多数決主義」の民主主義とは対照的である。多数決主義では、政府は国民の多数派の望むものに速やかに応えるような法律を制定し、政策を追求しなければならない。

米国モデルの民主主義政府、つまり多元的民主主義には、多数決主義より優れている点がいくつかあるが、そこには建国者たちが抱いた国のビジョンが現れている。多元的民主主義では、政府の権力が分散していかなければならず、権限が集中してはならない。このモデルによると、民主主義が存在するのは、政府の権限が複数の権力中枢に分散されている場合であり、その権力中枢はさまざまなグループ——例えば、労働者vs経営者、農民vs食料品店、石炭会社vs環境保護運動家——の利害に対して公平に開かれていなければならない。多元的社会ではこのようなグループは互いに競争する。

多元主義の理論における権限の分散は、政府が、もしかすると無謀かもしれない性急な行動を取るのを防いでくれるが、その一方、主要な権力中枢の意見が一致しなければどんな行動も起こせないということもある。米国の政府を特徴づけているのは分権ではあるが、一部の制度的特色には権力の集中化へと傾くものもあり、これによって政府が政策に関して全体の一致がなくても行動を起こせるようになる。この

エッセイでは、米国の政治システムのカギとなる特色が、政治権力の分散と集中のバランスを取るのに、どのように役立っているかを見ていく。

中央権力に対する不信感

英國王ジョージ3世の臣民だった最初の英國植民地13州の人々は、自分たちの生活を国外から支配する強大な中央政府を信用せず、1775年、英國支配に反旗を翻した。1776年の独立宣言は、国王が「これら13州に対して絶対的專制の暴政」をふるったとして非難している。植民地の住民は独立戦争を戦

いながら、「連合規約」(反乱を起こした13州で同盟のようなものを創設した文書)の下に「アメリカ合衆国」を形成した。1781年、ついに独立を勝ち取り、同年ようやく「連合規約」が承認され、実施された。

この連合政府の弱点が明らかになったのは戦後のことだった。権力が分散し過ぎていたのだ。連合政府には徵税権がなかった。執行権を持つリーダーもいなかった。通商を管理統制できなかった。その上、連合規約を修正するに



連邦議会の議事堂は連邦政治の中核である。写真右上に見えるのが連邦最高裁判所の建物

は全員一致の賛成が必要だった。1787年、各州代表が規約を改正しようとフィラデルフィアに集まったが、結局、まったく新しい「アメリカ合衆国憲法」を書き上げた。だが、この憲法は強大な権力をを持つ中央政府を設置したわけではない。代表たちはまだ、権力分散型でありつつも連合規約で認められていたやり方よりもっと中央集権的に調整できる政府を模索していた。新しい行政機構は、権力の分散と集中をうまく両立させた。その結果、200年以上たっても機能している持続的な政府となったのである。

権力分散化の特色

米国の政治システムには、権力の分散化を促すたくさんの特色がある。中でも、憲法にも盛り込まれているとりわけ重要な4つの特色は、(1)連邦主義、(2)権力の分離、(3)同等の影響力を持つ2院制の議会、(4)選挙制度(2つの異なる制度)である。

(1) 連邦主義

合衆国憲法の起草者たちは、連合型の政府を連邦型の政府に替えた。連合規約では、「主権と自由と独立」を保持する州の「永久同盟」を誓っていたが、合衆国憲法は主権については何も触れていない。この憲法は「われわれ合衆国の国民は」という文句で始まり、新しい政府は州ではなく個人を代表することをほのめかしている。連邦主義の概念では、2つ以上の同等レベルの政府が、同じ国民と同じ領土に対して権力と職権を行使する。例えば、中央政府(連邦政府)は外敵から国を守るために防衛力を備えるが、州政府は「警察権」を行使して、市民の健康や道徳、安全、福利を守る。連邦政

府は州の協力がなければ、これらの領域で行動を起こすことができない。連邦政府は、州のハイウェイ建設が全国的水準に達するように資金を提供したり、州立学校が一定の手順に従えば教育助成金を出したりしてもよい。警察権は州に分権化されているので、連邦政府の権限は、ハイウェイ建設や学校教育の向上、結婚や離婚の規制、犯罪者の処罰でも制限される。ほかにもいろいろあるが、これらすべてが州の管轄下に分権化されている。

(2) 権力の分離

合衆国憲法は、政治的権力を統治機構の3つの部門に分散するシステムをつくり出した。「すべての立法権」を連邦議会に与え、「行政権」を大統領に、「司法権」を連邦最高裁判所

および議会により設置された下級裁判所に与えたのである。その上、憲法はさらに権限を分散し、これら3部門が互いにチェックする方法を考え出した。一例を挙げると、議会には立法権が与えられたが、大統領には拒否権が与えられた。しかも、大統領が拒否権を行使しても、議会で3分の2以上の賛成が得られれば法案は成立する。もう一例挙げよう。条約の交渉は大統領の権限だが、上院で3分の2以上の賛成がなければその条約は発効されない。もう一例。議会が最高裁判所の構成を決め、大統領が最高裁判事を指名するが、最高裁判所は議会や大統領の決定が憲法に抵触すると判断すれば、それを無効にすることができる。最後の例に関して注意すべきは、議会や大統領の決定を無効にする最高裁判所の権限は、憲法に明記されていたわけではないということだ。これは、1803年の「マーベリー対マディソン」裁判における最高裁判所の画期的判決のあと、初めて慣例となった。

こうした権力の複雑な分離が、米国における行政権の分散化に寄与している。大統領は政府の計画を提案できるが、議会は通常、その計画を法案化し成立させることを求められる。その場合でも、その法律が提訴されたら、最高裁判所はこれを無効とすることができる。

米国で永続的な法律を成立させるためには、複雑なプロセスを経なければならない。立法は議院内閣制の方がやりやすい。世界の民主主義国家の間では、議院内閣制を採用している国がはるかに多い。そこでは議会の多数党または連立政党が、内閣により提出された法案をだいたい通過させ、ほとんどの裁判所は法律を無効にする権限を制限してきた。

(3) 2院制議会

米国の立法プロセスにおける権力の分散化は、2院制議会によってさらに促進される。世界には2院制議会(しばしば下院・上院と呼ばれる)の国は多いが、両院の権限がほぼ同等という国はほとんどない。米国の連邦議会の下院は、人口の



連邦議会の両院合同会議で演説するアフガニスタンのハミド・カルザイ大統領

規模に基づいて各選挙区から選ばれた435人で構成される。下院より少ない上院の議員数は100人で、年齢は30歳以上でなければならず(下院は25歳以上)、任期は6年(下院は2年)と上院の方が長い。上院議員も国民の投票で選ばれることは変わりないが、人口に関係なく各州2人と定められ、時期をずらして(2年ごとに3分の1)改選される。

合衆国憲法によると、上下両院の権限の違いはごくわずかしかない。歳入に関するあらゆる法案は下院だけが発議できるが、条約や大統領による政治的任命を承認するのは上院に限られている。こうした違いは、法案成立の権限が同等であることに比べれば、たいした問題ではない。法案は大統領が署名する前に同一の形式で各議院を通過しなければならない。その結果、(ほとんどの国と同様に)権限がどちらかの議院に集中するということはなくなり、両院に同程度に割り当てられる。

(4) 選挙制度

米国の選挙制度は1つではなく2つある。1つは大統領を選ぶ選挙、もう1つは連邦議員を選ぶ選挙である。この両方が権力の分散化に貢献している。まず大統領選挙を考えてみよう。米国の大統領選挙は、いわゆる一般投票の過半数を獲得した候補者が勝利するという「全国的」選挙ではなく、連邦制の選挙であり、「選挙人区」の選挙人538人の過半数(270人)を獲得した候補者が大統領の座に着く。(538という数字は、下院と上院の議席数にコロンビア特別区の持つ3票を加えたもの。)州の選挙人にはそれぞれ1票が与えられており、各州には下院の議席数と同数の選挙人がいる。最小規模の州(下院1人、上院2人)の選挙人票は3票しかない。最大規模のカリフォルニア州には55票与えられる。大統領選挙で投票するということは、実際には、各州の選挙人が投票を誓約している特定政党の候補者に1票を投じるということになる。一般投票のあと、各州の選挙人は州都に集まり、正式に大統領を選出する。(選挙人全員が一堂に会することはない。)各州の一般投票で過半数を得た候

補者が、その州の選挙人票をすべて獲得する。従って、大統領候補の選挙運動は国民全体に向けてではなく、それぞれの州に分散して展開される。

連邦議会の選挙制度も権力の分散を促す。大半の民主主義国家では、比例投票を使って立法府の議員が選ばれる。有権者は政党に投票し、その政党の得票率に応じて議席が配分される。米国では多数決投票によって議員が選ばれる。複数の候補者が1つの議席を争い、最も得票数の多かった候補者がその議席を獲得する。単独で選挙に勝ったのだから、下院議員は出身州と選挙区の要望に応え、再選を目指そうとする。そのため、地元の利益が国家の利益と衝突する場合、地元利益を優先しようとする。

権力集中化の特色

連邦主義、権力の分離、2院制議会、選挙制度、これらすべてが米国の権力分散化に貢献しており、米国は多元的民主主義のモデルの役割を果たしている。しかし、政治的権力の分割には、政府がまったく行動を



2004年12月13日、オハイオ州コロンバスの州議会議事堂で投票するオハイオ選挙人団の代表

起こせなくなったり、国民の大多数の利益より、組織化された少数派の利益のために行動するリスクが伴う。前述したように、憲法の起草者たちは、もともと権力の分散と抑制に心を碎いた。やがて、当時では予期されなかったようなある種の制度上の変更が行われ、それが権力の集中化を助けた。制度上の変更で特に注目すべきは、(1)大統領の地位、(2)2大政党制、(3)最高裁判所、である。

(1) 大統領

憲法起草者たちは第1条の立法府に2,200語以上費やしているが、第2条の行政府にはわずか1,000語しか充てていない。多くの起草者は大統領職を、主として、議会が提案可決した法律を実行するのに必要な行政管理職と見なしていた。しかし長い年月がたつうち、大統領は米国の政治体制の中心

点となった。現在では、大統領は国の目標を定め、その目標を達成するための法律を提案し、国の法令に財源を与えるための予算案を議会に提出し、もちろん世界情勢においては国益を代弁する。大統領は国内的・国際的危機に対応しながら、通常は議会の協力を得てその職権を拡大してきた。その結果、今では大統領職は最も世論に気を配る職務となっている。その意味で大統領は、民主主義国家の多数決モデルに足並みをそろえて、さらに重要な役割を果たしている。

(2) 2大政党制

政党は1787年まで存在しなかった。選挙で最多票を得た候補者を大統領に、次点者を副大統領に、議会が任命していたのである。1796年の選挙までは議会に2つの政党が誕生しており、この2政党は互いに大統領候補を出して対抗した。勝者ジョン・アダムス(連邦党)は、対抗馬だったトマス・ジェファソン(民主共和党)を副大統領として受け入れなければならなかつた。1804年の憲法修正条項は、政党の出現を認めて、選挙人が正副大統領を別々に投票することを定め、その結果として、政党が正副大統領両候補を公認候補として立てるようになった。しかも議会両院で政党が対立するようになったため、両院間の調整を促した。大統領を出した政党は、大統領と議会との調整を図った。米国の歴史上、ほとんど2大政党が政治の優位を占めてきたことも、権力集中化の一因となっている。米国の政治は民主党と共和党を中心に展開し、どちらかが与党になったり野党になったりする。少数党はほとんど力を発揮できないので、2大政党システムは権力の集中化に貢献している。

(3) 最高裁判所

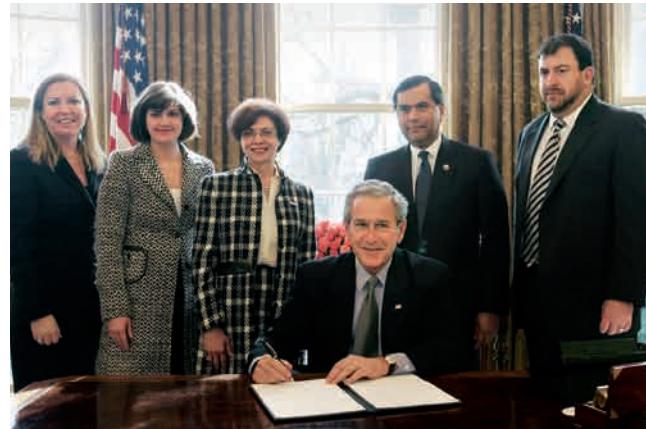
憲法起草者たちは連邦最高裁判所の規定を設けたものの、

それが新しい政府でどういう役割を果たすか、明確なビジョンがあったわけではない。司法府について述べている第3条は400語にも満たず、最高裁判所の権限についてはあまり多く触れられていない。1803年、最高裁判所は全員一致で、司法審査権(議会で可決された法律が合衆国憲法に合致しているかどうかを審査する権限)を強く主張した。この決定により、政治システムにおける最高裁判所の地位は向上し、さらには、賛否両論のある政府の行動については、その最終決定権を最高裁判所に与える結果となった。最高裁判所は、権力の分割されたシステムにおいて最終決定を下す判定者となることによって、権力の集中化を助けた。

結び

米国のシステムは、統治機関の権力があまりにも分散化されているため、最高水準にある多数決型の民主主義には及ばないとも言われる。しかし権力の分散化があればこそ、多元的民主主義の基準を見事に満たしているのだ。多元的民主主義は権力中枢の多極性を前提とするのだから。米国の政治システムは、民主主義的プロセスの中で意見の対立するグループに公平に開かれており、時間をかけて、徹底した多数決原理に基づくシステムより効果的に、さまざまなグループの利害に配慮する政策成果を生み出すであろう。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。



2006年1月、ホワイトハウスの大統領執務室で、「米国自由部隊」4周年記念の大統領宣言に署名するジョージ・W・ブッシュ大統領。この部隊は、2001年のテロ攻撃のあと、米国の社会奉仕活動を促進拡大するためにホワイトハウスによって創設された

AP/WWD

米国Q&A

アメリカ合衆国の国旗の星とストライプ（横じま）の意味は？

13本の横じまは独立当時の13州を象徴し、それぞれの星は州を表している。そのため、星の数と並び方は、州が合衆国に加わったときに変更される。アラスカ州とハワイ州が合衆国に加わった1959年に、星の数は50になった。

なぜアメリカ合衆国の国の色は、赤、白、青なのか？

1782年に国章が承認されたとき、大陸会議の事務局長は、白は純潔と清浄を、赤は勇気と果断を、そして青は警戒、忍耐、公正を意味すると述べている。

アメリカ合衆国には、いくつの州があるのか？

50州である。コロンビア特別区（ワシントンDC）は、首都として特別に造られた連邦の区である。プエルトリコは合衆国に連合したコモンウェルス（準州）で、その他の米国領には、アメリカンサモア、グアム、ミッドウェー諸島とバージン諸島などがある。

アメリカ合衆国の公的なシンボルは？

白頭鷲が合衆国のシンボルとして最初に用いられたのは、1776年に鋳造されたマサチューセッツの銅貨である。そして、議会は1789年に初めて白頭鷲を国の象徴として選定した。強さ、勇気、自由、不死のシンボルであると考えられる白頭鷲は、他の鷲と違って北アメリカだけに生息する。

アメリカ合衆国憲法の最初の言葉は何か？

われら合衆国の国民は、より完全な連邦を形成し、正義を樹立し、国内の平穏を保障し、共同の防衛に備え、一般的の福祉を増進し、われらとわれらの子孫のために自由の恵沢を確保する目的をもって、ここにアメリカ合衆国のためにこの憲法を制定し、確定する。

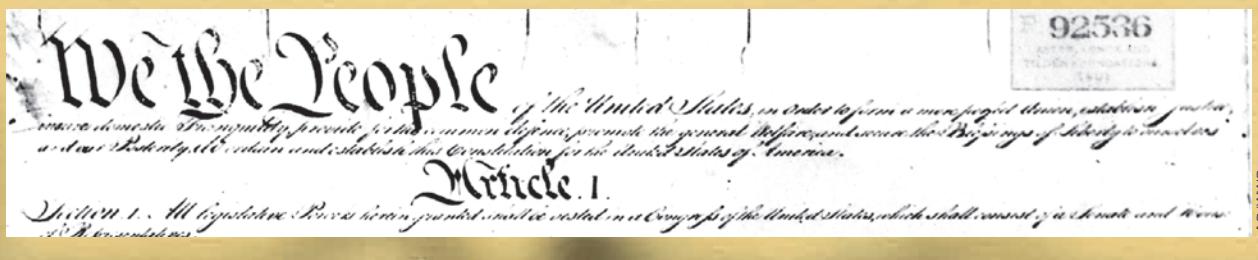


AP/WWP



白頭鷲

AP/WWP



AP/WWP

「憲法の父」と呼ばれる人は誰か？

バージニアのジェームズ・マディソンである。なぜなら、マディソンは憲法草案の立案に卓越した手腕を発揮し、憲法制定会議において説得力のある主張を展開したからである。

憲法制定会議で議長役を務めたのは誰か？

ジョージ・ワシントンである。彼は満場一致で選ばれた。

どのくらいの期間でアメリカ合衆国憲法をまとめ上げたのか？

休みの日を除いて、100日はかかるなかった。

合衆国憲法を批准した州の順番は？

デラウェア、ペンシルベニア、ニュージャージー、ジョージア、コネティカット、マサチューセッツ、メリーランド、サウスカロライナ、ニューハンプシャー、バージニア、ニューヨークの順である。ジョージ・ワシントンが大統領に就任して後、ノースカロライナとロードアイランドが合衆国憲法を批准した。

「アメリカ合衆国」という言葉が使われ始めたのはいつからか？

「アメリカ合衆国」の正式な言葉の使用として知られているのは、独立宣言書の中である。トマス・ペインは1776年2月に、「自由で独立したアメリカの州」と既に書いていた。「United Colonies」、「United Colonies of America」、「United Colonies of North America」、「States」などの呼び方も1775年と1776年には使われていた。

1789年の採択以来、いくつの修正が合衆国憲法に加えられたか？

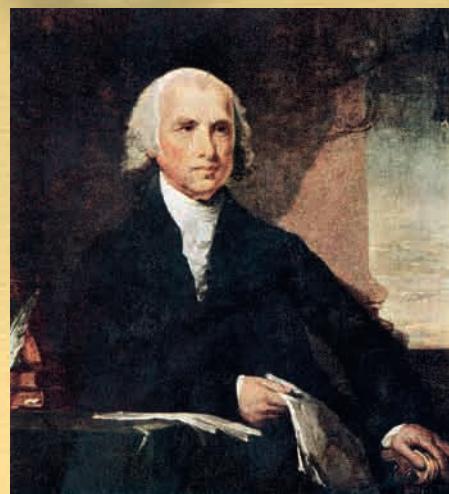
27の修正が加えられている。

「独立宣言」の中で最も多く引用されている言葉は？

「われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」

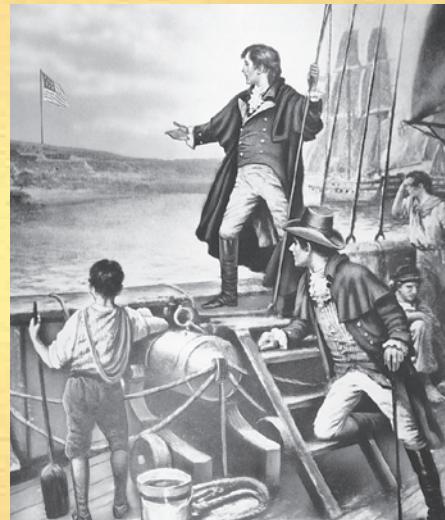
アメリカ合衆国の国歌「星条旗」の最初の歌詞は？

おお 見えるだろうか 夜明けの光の中に
黄昏の薄明かりの中でわれわれが誇りをもって称えたあの旗が
その太い縞と輝く星は 危険な戦いの間中
われわれが見守る壁の上に 雄々しく翻っていた
赤い閃光を放つロケット弾 空中で炸裂する爆弾は
われわれの旗がまだそこにあることを夜通し示してくれた
おお、あの星条旗はまだ翻っているのか
自由の地 勇者の祖国の上に



ジェームズ・マディソン大統領の肖像（ギルバート・スチュアート画）

AP/WWP



AP/WWP

1812年の米英戦争で英軍の爆撃を目撃した翌日、ボルティモア港のフォート・マクヘンリー砦の上にはためく米国旗を眺めるFrancis·スコット·キーを描いた絵。その光景は、この詩人の心を揺るがし、「星条旗」という詩を書かせた。1931年、「星条旗」は公式に米国国歌となった

米国の文化的タペストリー

ゲーリー・ウイーバー

ゲーリー・ウイーバーはアメリカン大学(ワシントン)国際コミュニケーション学部・国際関係研究科教授。

米国人の行動や社会政策を理解するためには、米国の文化を知ることが不可欠である。多くの言語において文化とは、アートや音楽、歴史、文学を指す。こうしたものは、米国では文化の所産と見なされる。われわれの文化の定義はもっと人類学的だ。米国英語で「文化」とは、世代から世代へ学習を通して伝えられる、人間のある集団の生き方という意味にすぎない。そこには、米国人の大半が共有している基本的な信念、価値観、思考様式、世界観なども含まれる。こうした文化の外的要素を調べ、それが内面的な価値観や信念や世界観のあらわれだと推測することができる。米国の内面的文化を理解しなければ、社会政策も含めて、外的行動を説明するのは不可能に近い。

米国でひときわ優勢な主流を占める文化を、具体的なイメージで表現するなら、氷山を考えてみるといいだろう。氷山の大部分は水面下に隠れている。文化についても同じことが言える。その大部分が内面的なもの、つまりわれわれの頭

の中にあるもので、自覚している意識の水面のはるか下にある。太陽や雨で氷山が融けるように、目に見える先端は変わるものかもしれないが、基盤になっているところは長い時間がたってもあまり変わらない。同じように、われわれの基本的な信念や信仰、価値観、考え方、世界観などはきわめてゆっくりとしか変わらない。

文化のそうした部分は、人が特定の社会や家庭の中で育つだけで知らず知らずのうちに習得される。朝食の席で親が子供に「文化的価値観」についてレッスンをするわけではない。むしろ、特定の家族の中で大きくなっていくだけで無意識に身につくのだ。われわれが自分の国を離れてほかの文化を持つ人々と交流するまで、自分の文化的価値観について比較的無自覚なのはそのためである。

個人の実績を重視する

米国に最初に到着した移民は、ヨーロッパの信念と価値観を「新世界」へ持ち込んだ。彼らが上陸した所には、天然資源が無限にあり、他人より抜きん出る機会がいくらでも転がっているように見えた。ヨーロッパでは、貧しい家庭に生まれれば貧しいまま死んでいった。ヨーロッパの信念や価値観と豊富な資源や機会とが結びついて、新しい一組の文化的価値観がつくられた。われわれはそれを「米国」の文化的価値観と呼ぶ。

こうした個人の実績や階級移動性という新しい考え方や価値観は、それなりに報いられ、ますます強化された。それからの米国人は、何をする人間かという観点から自分を確認するようになった。パーティで米国人に会うと、たいていこんなふうに声をかけられる。「こんにちは、わたしはゲーリー・ウイーバーといいます。アメリカン大学の教授をしています。あなたは何をなさっていますか?」

しかし、ほかの文化で育った人々は、自分が誰であるかという観点で自己確認することが多い。西アフリカ人なら「こんにちは。わたしはパプ・セカといいます。上流のバッセから来たタムシエの息子のパプ・セカです」というかもしれない。その人が自己確認のために第一に挙げるよりどころは、



©Ralph A. Clevenger/CORBIS



AP/WWP

アフリカ系米国人の祝日である「クワンザ」初日の夜、ろうそくに火をつけるティナ・ソロモン(88)。マサチューセッツ州ブロックトンにて

自分がどこの誰であるかということ、つまり自分の父親や出生地なのである。その身分は家族や先祖伝来のものであって、彼が個人としてやっていることや将来やりそうなことはない。

強大すぎる中央政府への不信感

ヨーロッパの習慣とは違って、米国の海岸にたどり着いた最初の入植者たちは、国王や女王や教皇の存在を望まなかつた。強大すぎる中央政府には警戒心を抱いていたのだ。米国の偉大な哲学者ヘンリー・ソロー(1817-1862)の言葉を借りれば、「小さい政府ほど良い政府」と信じていた。むろん、「新世界」には対外的問題や貿易を扱う中央政府が必要なことは認めていたが、日常生活に大きな影響を与える問題は、地方の行政政府の責任と見なされた。

米国には全国的な警察隊というものが存在したことがない。福祉や法の執行、裁判の判決、弱者への配慮といった問題は、地方に管轄権がある。言論の自由や報道の自由、信仰の自由など、米国の市民的自由は、合衆国憲法と権利章典に基づいている。この合衆国憲法と権利章典が個人の自由を保護し、中央政府が強大になりすぎないようにしているのだ。

まったくの「るっぽ」というわけではない

米国はさまざまな異文化が混じり合っている国で、1つだけ突出して主流をなしているような文化はないと信じている人が多い。こうした仮説のせいか、よく「るっぽ」という比喩が使われる。世界中からやってきた人々が自分たちの文化を持ち込み、米国のるっぽの中へ放り込む。そして、さまざまな文化が一緒になって融けてしまうまでかき混ぜられ熱せられるというわけだ。

そういう考え方にも一理はある。確かに米国は文化的に多様な社会である。しかし、それでもやはり、ひときわ優勢な主流文化はあるのだ。移民は、社会の主流に加われるように、自分たちの持ち込んださまざまな特徴を捨てて、主流文化に合流した。米国には、白人、アングロ・サクソン、プロテスタント、男性というひな型をモデルとした文化的「クッキー型」アプローチがあったという主張もあるだろう。白人男性の移民は英国系の名前に変えて、プロテスタントのキリスト教に改宗し、訛りのない英語をしゃべれば、簡単にそのひな型に



AP/WWP

メキシコのダンスを踊る「ソチケツアル・ティクン」のアーリート・デル・リアル(左、5歳)とハビエル・アクーナ(6歳)。アラスカ州アンカレッジで開かれた「ミート・ザ・ワールド」のイベントで

適合できた。しかし、みんながクッキー型に合わせられたわけではない。性別や皮膚の色、髪の質感までは変えられない。簡単に融合できた人間とできなかった人間がいたのだ。

「モザイク」か「タペストリー」になる

もちろん、米国も変わった。るっぽ文化とかクッキー型文化を受け入れる米国人は、もうほとんどいない。実際、現在では米国をモザイクかタペストリーとして描写するのが普通になってきた。そういう比喩が一般的になっているという事実からうかがわれるのは、自分たちの特徴である違いを維持したまま社会全体の一部になれるということだ。モザイクやタペストリーでは、ひとつひとつの色がはっきりと識別でき、その色は全体の美しさをさらに美しくする。モザイクから1枚のタイルをはがしたり、タペストリーから1本の糸を抜いたりすれば、全体を台無しにしてしまう。今の時代は、違いを維持しやすくなった。性別や人種、国籍、民族的背景、宗教、性的指向の違いは受け入れられ、人生の目標を達成するために平等な機会を得ようとして、その違いを捨てる必要もない。

「～系の米国人」と呼ばれる人々、つまり異なる2つの文化や民族性を持つ人々には、1人の人間が自分の民族や国籍、宗教、人種のアイデンティティを保持しながら、なおかつ米国人であるという考えがあらわれている。例えば、メキシコ系米国人、アイルランド系米国人、アフリカ系米国人またはブラック・アメリカン、アラブ系米国人、ムスリム系米国人、そしてアメリカン・インディアンなどはすべて、正真正銘の米国人でありながら2つのアイデンティティを維持している。もちろん、米国という国を1つにまとめているのは、共通の価値観と信念だけではなく、英語という言語と共に体験もある。

4州(ニューメキシコ、テキサス、カリフォルニア、ハワイ)とコロンビア特別区では、人口の規模からいえば非ヒスパニック系白人が少数派になった。大方の人口学者によれば、2050年までには米国全体でも非ヒスパニック系白人が少数派になるという。しかし、この傾向が平均的米国人に脅威を抱かせることはないようだ。それどころか、ほとんどの米国人は、多様性が問題解決能力を高め、生産性が増大すると考えている。

これが多文化のモデルであり、文化の違いが歓迎されているばかりか、強みとして評価すらされているということだろう。少数派が主流文化に合わせて自分たちの違いを捨てざるを得なかつた昔に戻りたいという人はほとんどいない。多様性は、受け入れるべき機会であって、克服すべき障害ではないのだ。

現代の米国が直面している問題は、どうやって違いを解消するかではなく、それほど多様な違いを持つ社会をどのように運営していくかということだ。米国はこれまで常に多様な社会ではあったが、もはや、単にヨーロッパのさまざまな国や民族の集団をまとめるといった状況ではない。今日の多様性とは、すべての人種や民族や国籍の人々、男、女、身体障害者、あらゆる年齢の被雇用者、さまざまな性的指向を持つ人々、を意味している。人口構造の変化や地球規模での相互依存、そして多様性の明らかなメリットという現実があるからには、米国は、あらゆる文化的背景を持つ人々とコミュニケーションを図って協力し合うために必要な技術を取り入れて発展させていくだろう。

この記事の意見は、必ずしも米国政府の考え方や方針を反映しているものではありません。

やる気あふれる5人

ポール・マラマッド

ポール・マラマッドは国務省国際情報プログラム局のスタッフ・ライター。

走る起業家



ジェニファー・ライトタブス

Courtesy of iRUNLIKEAGIRL Color Classics.
Peoria, Illinois.

どんなビジネスでも、成功しているブランドはよく売れる。しかし、新しいビジネスにふさわしいブランドを生み出すことができれば、それは自分の人生のメッセージにもなる。イリノイ州ピオリアのジェニファー・ライトタブスは今まさにそのことに気づきつつある。

今年3月、広告業界で働いた経験を持つライトタブスは、iRUNLIKEAGIRLというブランド名のアパレル事業を立ち上げた。注目度抜群のこのブランド名は、学校の運動場でよく使われた「女の子のように走る」というあざけりの言葉から思いついたものだ。それを逆手に取って、運動と自発性の大切さを女性に向けて発信した、誇り高いメッセージをしている。「間違いなくネガティブな表現として使われていた言葉を、もっとポジティブな表現に転換したんです」とライトタブスは語る。

ライトタブスはまた、「大事なのは、毎日やらなければならない仕事や義務を走り抜けること、人生の楽しいことも落胆することも走り抜けること、健康のために走ること、走れるから走ること」と地元のジャーナル・スター紙に述べている。自身も熱心な長距離ランナーで、スローガンの意図は、楽しく生きるために日々の生活のいろいろな領域でうまく走ろうという意欲を、女性たちに持ってもらうことだという。「それは生き方であり、自分たちのありのままの姿を感じることなんです」とも語る。迅速に動くことならお手のもののライトタブスは、40歳以上の女性のための「モア・マラソン」とその2週間後に行われた有名なボストン・マラソンで事業家としてのデビューを果たし、ビジネスを開始してから数週間で

数万点を売り上げた。顧客は「永遠の少女のような気持ち」を持った女性たちや、共に生活する女性のためにと買い求める男性だった。

アイオワ生まれのライトタブスは、大学時代にトラック1周1マイルのジョギングから始めた。シカゴに移ったあと、もっと長い距離を走り始め、27歳のときシカゴ・マラソンにエントリー。それ以来、マラソン大会には8回参加している。

スポーツウェアiRUNLIKEAGIRLのウェブサイトは、走ることが1人の女に何をもたらしたかをあらゆる女性に知ってほしい、と語りかける。そしていかに活力や自発性や熱意が——それと、限界を知らない大胆不敵な姿勢も——ライトタブスの言う「元気いっぱいに走ること」へとつながるかということ。ビジネスはまだ始まったばかりだ。「一番大変なのは、今は全部自分で管理しなければならないこと」だという。現在はマンハッタンへ移転する過程にあり、ゆくゆくはさらに手を広げ、ウェブでの事業運営から小売店展開を始めたいと考えており、その展望には、慎重ではあるが自信を感じている。将来は米国の町や都市に、できれば世界中に、自分のブランドを行き渡らせるという壮大な構想も抱いている。

貧者の医師

ポール・ファーマーは貧しい家庭に生まれた。子供のころには、フロリダのトレーラー・パークに止めた改造バスやテントやハウスポートの中で、大勢の家族と暮らしたこと



ポール・ファーマー

AP/WWP

もある。それでも今は、世界中の人々に医療を届ける活動に携わり、強い影響力を持つ指導者になっている。

ファーマーはハーバード大学の医学生だった1987年、仲間の学生ジム・ヨン・キムと一緒にボストンを本拠地とする「パートナーズ・イン・ヘルス」(PIH)という組織を結成し、ハイチに診療所をつくった。10万人に援助の手を差し伸べたこの診療所は、世界中の貧困地域で病気と闘いながら、幅広い社会奉仕や自己改善に役立つ活動を行っている同じような診療所のモデルとなった。「パートナーズ・イン・ヘルス」は、その目標を、「最も必要としている人々に現代医学の恩恵を届け、絶望の防御策として役に立つこと」と位置付けている。PIHモデルの標準には、移動検査車や保健師訓練プログラム、診療所、在宅訪問の複合薬物治療のほか、感染症の研究も含まれる。ファーマーらが開発した画期的な投薬プロトコルは、シベリアやペルーなど広い範囲の地域で、薬物耐性結核やエイズの死亡率を減少させている。

自分は「貧者の医師」だ——ファーマーは作家のトレシー・キダーにそう語ったことがある。キダーがファーマーについて書いた「国境を越えた医師」(Mountains Beyond Mountains)はベストセラーになった。ファーマーは、次は地球上の飢餓や病気や不必要な大量死を減らす活動に取りかかりたいと考えている。「世界の貧しい病人が手当もされずに死んでいくのは間違っている、と世の中の人々にわかってもらえるはず」とファーマーは言う。「わたしたちはそういう状況を変えることができるのです」

最新ファッションのデザイナー



Courtesy of Anna Umnatskaya

トウ・ティエン・ダオとフエ・タック・ルオンは1979年にラオスから米国に渡って来たとき、8人の娘たちに夢を託していた。夫婦はテキサス州ヒューストンでドライクリーニング店と仕立て屋を始めたが、勤勉な移民によくあるように、子供たちにはいい教育を受けさせて、法曹界か医学界で活躍してほしいと願っていた。

しかし6番目の娘クロエの考えは違った。10歳のころには、CNNの「スタイル・ウイズ・エルザ・クレンシュ」という最新ファッションを紹介する番組を食い入るように見るよう

になった。ティーンエイジャーになると、ガレージで美しいファッションへの夢を追い始め、ねじや座金などのガラクターでアクセサリーを作ったりした。大学入学後はマーケティングを専攻するかたわら、コミュニティ・カレッジのデザイン講座にかよい、その後ニューヨークの「ファッション・インスティチュート・オブ・テクノロジー」(服装工科大学)を訪ねた。

「父と母のことは大好き」とクロエはサンノゼ・マーキュリー・ニュース紙に語っている。「でも、自分の夢を追わなくちゃ。自分のやりたいことのために生きなければね」

ニューヨークへの旅は、イブニングドレスの業界で働くきっかけになった。クロエは小さなデザイン会社の経営を手伝い、会社を数百万ドル企業にのし上げた。2000年、ヒューストンに戻り、8人姉妹にちなんで命名した自分のブティック「ロット8」を設立。ガウンやワンピースやスポーツウェアのコレクションが誇らしげに並ぶ「ロット8」は、今やヒューストンでも屈指の有名ブティックとなり、全米から注目が集まっている。

クロエはBravoテレビの「プロジェクト・ランウェイ」にも参加している。このリアリティー番組は毎週いろいろなデザイナーが登場して、デザイン上の問題解決を競い合う。クロエは番組の第2シーズンで優勝し、その賞金10万ドルは新商品を立ち上げる資金の一部となった。「わたしはみんなのためにデザインするの」とクロエは言う。「素晴らしいファッションは平等主義なんです」

前途有望な学生



Courtesy of Anna Umnatskaya

アンナ・ユマンスカヤは米国の典型的ティーンエイジャーではない。その理由の1つは、18歳にしてニューヨークのブルックリンのアパートで独り住まいをしているのだから。もう1つは、人並外れた集中力で自分の人生に取り組んでいるから。アンナは最近、ニューヨーク・タイムズ紙の大学奨学金制度に応募して合格した。

2006年の同奨学金には、ニューヨーク市内の高校生1,400人が応募したが、成績と学問的潜在能力の審査で、アンナのほか18人の高校3年生が選ばれた。アンナはこの奨学金3万ド

ルでブランダイス大学へ行くことができる。その上、ニューヨーク・タイムズから奨学生に、夏期インターン制度、ラップトップ・コンピューター、学問的カウンセリングが提供される。アンナは大学で国際関係論を勉強するつもりだ。

10歳のとき、祖母に連れられてモスクワから渡米したアンナは、遠く離れた親戚の家を転々とするつらい少女時代を送った末、とうとう自力で独り暮らしを始める。現在はフランクリン・デラノ・ルーズベルト高校の3年生だが、生活費を稼ぐために夜はコーヒー・ショップでウエートレスとして働く。それでも成績はトップクラス、老人のためのボランティアもやり、暇を見つけては自分流に文章も書いている。去年は、ブルックリンで毎年開催される「ホロコースト追悼スカラシップ」という高校生のエッセイ・コンテストで入賞した。

これまでのところ、アンナ・ユマンスカヤは、米国に渡った移民の伝統的な物語そのままの人生を歩んでいる。つらい体験、厳しい労働、チャンスの到来。「わたしは人一倍努力しなければならなかった」とアンナはニューヨーク・タイムズに語っている。「自分の夢を実現するため、ブランダイス大学に入るため、たまには自分のいたいところにいるために」

元囚人のカウンセラー



Courtesy of Exodus Transitional Community, Inc.

ジュリオ・メディナ

ある人間にとて、一生の仕事を見つけることは大変な努力が必要となる。「エクソダス・トランサンショナル・コミュニティ」のジュリオ・メディナの場合もそうだった。彼は苦い体験から学び、這い上がってきました。

メディナは若いころ麻薬を売って逮捕され、12年の実刑判決を言い渡された。しか

し、ニューヨーク州の刑務所で宗教団体「エクソダス・グループ」のカウンセリングを受けたことも含めて、この体験から、仲間のために働くことが自分の崇高な使命だと思うようになった。1996年、釈放されたメディナは、薬物乱用者とHIV感染者のカウンセラーとして活動を始めた。

そして最終的には、社会復帰を目指す元囚人たちの問題に専念することにした。自身の体験から、釈放された受刑者が再び犯罪に走る確率がどんなに高いか、そしてそうなる理由も、よくわかっていたからだ。なかなか仕事にありつけない。感情の激発を抑えられない、家族と会話を結べない……。1999年、メディナは資金を得て「エクソダス・トランサンショナル・コミュニティ」を設立した。社会に復帰できない悩みを抱える元囚人たちは、ここで実際的な支援を受けることができる。

ニューヨークのイースト・ハーレムに本部を置く「エクソダス・トランサンショナル」は、これまでに、刑務所や薬物乱用やホームレスの生活から、より広い社会へ出ていく男女1,500人以上を手助けしてきた。エクソダスは自己査定プログラム、カウンセリング、住宅や仕事の斡旋のほか、コンピューターの訓練なども行っている。労働省主導で行われているプロジェクトに参加しているエクソダスによれば、そこで支援した人々の累犯率は減少しており、75パーセントが普通の生活へ復帰するという。(米国全土では、元囚人の3分の2が刑務所に舞い戻る。)

メディナは、元囚人を助けるのに最適な人間は元囚人自身だと信じている。「その苦労をくぐり抜けてきた男や女よりもそれをやれる者はいない」とある新聞にも語っている。「わたしたちはこういう問題を扱うエキスパートだ。われわれこそが事態を改善していくだろう」

米国ミニ知識

Statistical Abstract of the United States
<http://www.census.gov/compendia/statab/>

地理

総面積（平方キロメートル）	9,631,418
1平方キロメートルあたりの人口（2006）	32.56

経済

国内総生産（2005）	\$11,134,600,000,000
世帯所得の中央値（2004）	\$44,389
1人あたりの収入（2003）	\$23,276
GDP成長率（2005）	3.5%
失業率（2006年2月）	4.8%
年間失業率（2005）	5.1%
民間非農業雇用者数（2005）	139,532,000
小売売上高（2003）	\$3,275,407,000,000
1人あたり小売売上高（2003）	\$11,254
少数民族所有企業（2002）	17.9%
女性所有企業（1997）	30.0%

教育

識字率（UNESCO Human Development Report）	99%
大学校数（Digest of Education Statistics）	4,168
小学校数*	61,572
中等学校数*	26,541
大学教育の費用（Digest of Education Statistics, 2003-04による推定）	\$9,246 (1公立校あたり/年) \$24,748 (1私立校あたり/年)

* *Characteristics of Schools, Districts ... 2003-04 Schools and Staffing Survey, NCES Online*

米国のイコン

「イコン」という言葉は宗教に起源がある。最初は、東方正教会が伝統的に使っていたキリスト像などのように、聖人像のことだった。しかし、その意味は広がり、今では強い影響力のあるシンボル的存在まで含むようになった。例えば、ニューズウイークは数年前「トップカルチャーのイコン200人」を発表している。

ニューズウイークのリストにならって、ここでは32人の米国のイコンを挙げてみよう。中には、エルビス・プレスリーやマリリン・モンローのように米国の大衆文化を象徴する世界的に有名なスターもいれば、この国の偉大な政治家や公民権運動指導者、科学者、起業家、作家、スポーツ選手もいる。米国のイコンたちに共通する点は、まさに「イコン」の名に値する名声を国民の間に勝ち取っているということだ。すなわち、米国人の多くにとって、彼らの人生は、この国的重要な何かや、人生の指針となるような価値観を象徴している。

ここに登場する人物たちをよく見ると、いくつかのパターンが浮かび上がってくる。1つは、移民と、着実に広がる多様性というおなじみ

の物語だ。ここでは年代順に並べたので、最初は「建国の父」の世代、英国出身の男性の独壇場となる。時代を経るにつれ、女性やネイティブ・アメリカン、アフリカ系米国人が、米国という大河小説の主役を演じるようになる。そのうち少しづつ、ヒスパニックやアジア系、その他の民族グループの米国人が米国社会での役割を担いだす。

編集部では、誰を取り上げるかという議論をしながら、米国のイコン・リストを作ろうとすれば、どうやっても取りこぼす重要な人物が出てくると痛感した。要するに、米国の歴史に登場するイコンを全部入れたら何冊もの本になるが、ここでは32人しか取り上げるスペースがないということだ。

読者にとっても米国のイコンとして取り上げたい人物がいるだろう。その場合は、推薦したい人物の名前とその人こそ米国のイコンだと考える理由を簡潔に書いて、eJournalUSA@state.gov宛てにお寄せください。次回このようなリストを作るときの参考にいたします。



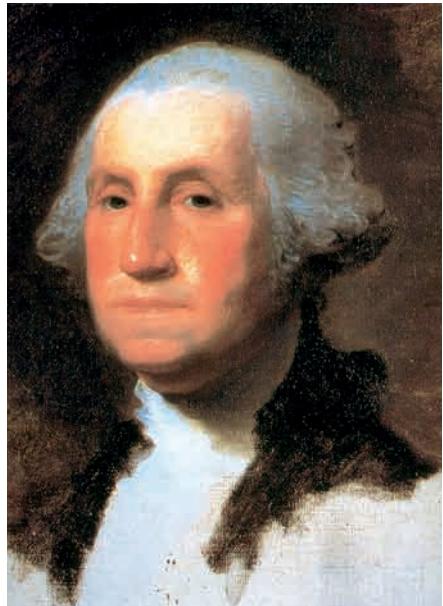
(All images © AP/WWP)

米国のイコン

ベンジャミン・フランクリン(1706-1790) フランクリンは「建国の父」の1人で、素朴な実践的知恵の達人として知られる。身分の低い家に生まれたフランクリンは、印刷業や文筆業で頭角を現し(「プーア・リチャードの年鑑」Poor Richard's Almanackを出版)、やがて発明家や科学者として有名になり、晩年にはきわめて有能な外交官としても活躍。独立宣言と合衆国憲法へ道を開いた数々の会議の舞台裏で、重要な役割を果たしている。

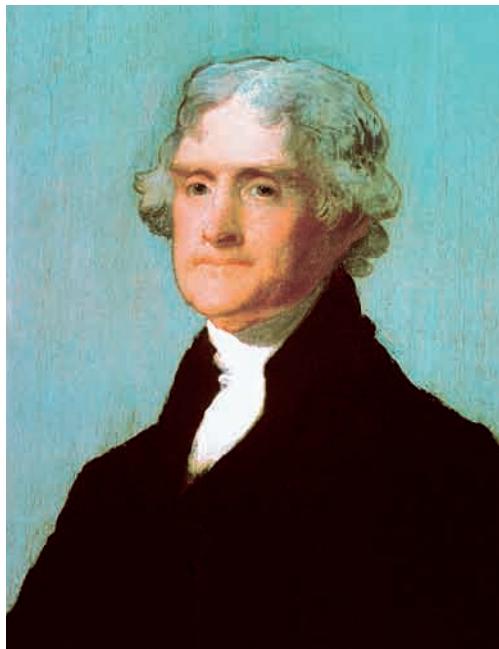


Library of Congress



AP/WWP

ジョージ・ワシントン(1732-1799) 米国の初代大統領。大英帝国から離反した独立戦争の間ずっと米国の最高司令官を務めたワシントンは、しばしば「国父」と呼ばれる。もともとはバージニアの農園経営者だったが、軍人として偉大な指導力を發揮した。民衆に高い人気があり、連邦議会から「戦争で先頭に立ち、平和でも先頭に立ち、同胞の心にも真っ先に刻まれた」と賛辞を贈られた。



AP/WWP

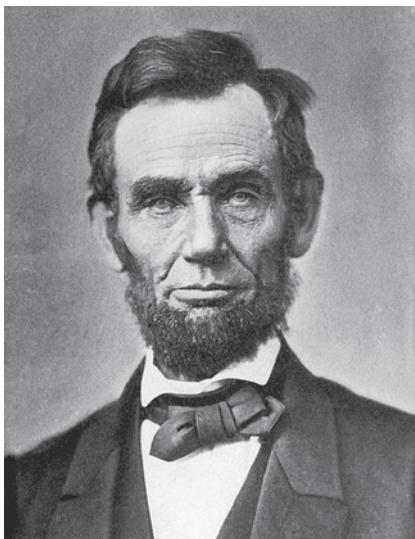
トマス・ジェファソン(1743-1826) ジェファソンは1776年の独立宣言を起草した。「われわれは以下の事実を自明のものと見なす。すなわち、すべての人間は平等につくられていること、そして創造主により、生存、自由、幸福の追求を初めとして、奪うことのできない一定の権利を与えられていること」と書いた。のちに第3代大統領に選ばれる。また宗教の自由を認めたバージニア州法を起草し、バージニア大学を創立した。

米国のイコン



サカガウェイア(ca.1786-1812) 現在のアイダホ州にあたる地域に住んでいたレムヒ・インディアンの若い女性サカガウェイアは、ルイスとクラークの探検隊が1804年から1806年にかけて、新しく米国領となった西部の広大な土地の調査に出かけた際、案内役として加わった。サカガウェイアはさまざまな部族の言語を話せたので、通訳の役割も兼ねた。探検隊がサカガウェイアの出身部族に出会ったときには、彼女が馬と食料と休息場所を手配し、そのおかげで探検隊は太平洋岸までたどり着くことができた。写真は、伝統衣装をまとったサカガウェイアの子孫の1人ウィロー・ジャック。

エイブラハム・リンカーン(1809-1865) 南北戦争(1861-65)の期間、大統領の座にあったリンカーンは、北部諸州を一致団結させ、奴隸解放へ導いたとして尊敬されている。イリノイ州の下院議員だったリンカーンは、共和党大統領候補の指名を獲得し、1860年、奴隸制反対を公約に掲げて当選した。その結果、南部11州がアメリカ合衆国から離脱し、内戦が始まった。ゲティスバーグの演説では、「人民の、人民による、人民のための統治が、地球上から消滅することはない」と決意を表明した。



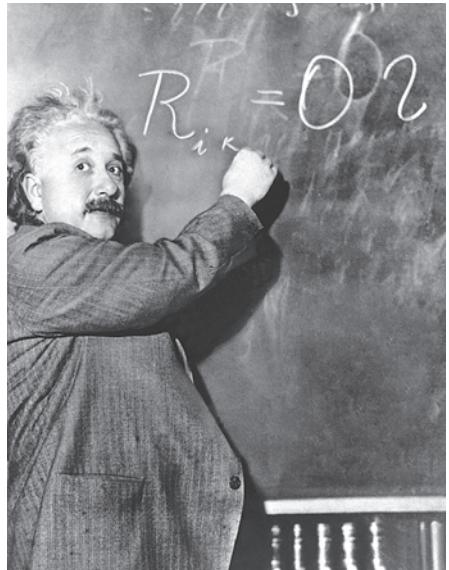
スーザン・B・アンソニー(1820-1906) 憲法修正第15条(1870)によって解放された奴隸に投票権が保証されたのに、女性に対しては認められないことに愕然としたスーザン・B・アンソニーは、女性の一団を引き連れて、ニューヨーク州ロチェスターの投票所へ押しかけた。投票を試みては何度も逮捕され、のちに国際女性参政権同盟(The International Woman Suffrage Alliance)を結成した。女性の投票権への道をつけて1906年には他界したが、1920年、その運動は憲法修正第19条として実を結んだ。

シッティング・ブル(ca.1831-1890) ネイティブ・アメリカンの偉大な族長たちの最後の大物。スー族のリーダーだったシッティング・ブルは、大平原のインディアンの土地を守ろうと、見込みのない、だが断固たる戦いを試みたことで知られる。当時バッファローはインディアンの生活に欠かせない動物で、膨大な群れがいたが、1800年代半ばに米国東部から流入した狩猟者や兵士、定住者たちによって絶滅寸前になった。1876年、インディアンの部隊を率いたシッティング・ブルは、有名なリトル・ビッグボーンの戦いで、ジョージ・カスター将軍の指揮する連邦政府軍と戦った。



米国のイコン

アルバート・アインシュタイン(1879-1955) 20世紀最高の物理学者アルバート・アインシュタインは相対性理論を展開し、それまでの物質的世界の本質に関する考え方を根底から覆した。1879年ドイツに生まれ、若いころから重要な理論を発表した。1933年、ナチスによりドイツを追われ、ニュージャージー州プリンストン大学の高等研究所に職を得た。第2次世界大戦中、その理論は原爆開発に役立つことが立証された。



AP/WWP



AP/WWP

フランクリン・D・ルーズベルト(1882-1945) 米国は、大恐慌と第2次大戦という南北戦争以来最大の危機に見舞われたが、フランクリン・D・ルーズベルトの楽観主義と政治的手腕もあって、この困難な時代を切り抜けた。1933年に大統領に就任。その後にあった12年間、祖国が経済的に立ち直り、枢軸国に勝利するのを見守った。フランクリン・D・ルーズベルトは貧困層にとってはヒーローだったが、多くの実業家は彼の経済社会改革「ニューディール」を快く思わなかった。

米国のイコン

ハリール・ジブラーン(1883-1931) レバノンで生まれた詩人ジブラーンは12歳のときに米国に移住。このアラブ系米国人の最高傑作「予言者」は人々に大きな影響を与え、50年以上も続くベストセラーになった。米国連邦議会は1990年、ワシントンに「ハリール・ジブラーン記念・詩の庭園」(Khalil Gibran Memorial Poetry Garden)を設立した。ジブラーンは、「神は真実に多くのドアを取り付け、そのドアを叩くすべての信ずる者を歓迎した」と書いている。



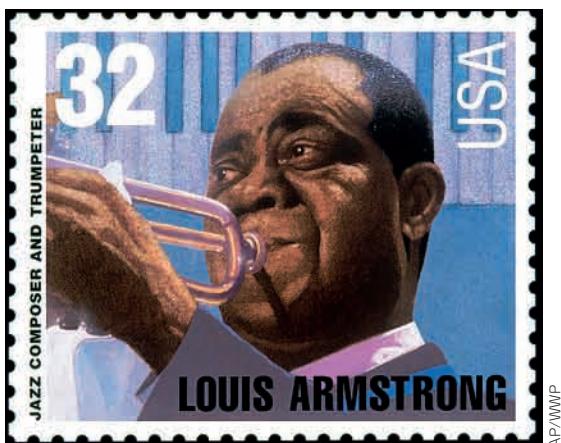
AP/WWP

エレノア・ルーズベルト(1884-1962) エレノア・ルーズベルトは第26代大統領セオドア・ルーズベルトの姪で、第32代大統領フランクリン・德拉ノ・ルーズベルト大統領の妻だった。1933年から1945年まで、夫の打ち出した政策「ニューディール」や公民権運動のためにファースト・レディとして尽力した。また女性として初めて、全国的な政治集会で演説し、全国の新聞に配信されるコラムを執筆し、定期的に記者会見を開いた。さらに、国際連合の創設を助け、人権委員会の委員長として世界人権宣言の起草と承認に力を注いだ。



AP/WWP

アーネスト・ヘミングウェー(1899-1961) 「世界で最も実行困難なことは、人間について本当に正直に書くことである」とアーネスト・ヘミングウェーは述べている。第1次世界大戦中に赤十字要員として志願、傷病兵の輸送に携わった。1920年代のヨーロッパに住み、同世代の戦争体験を書いた初期の小説「日はまた昇る」と「武器よさらば」で人気作家となった。長年にわたり作家として活躍し、1954年ノーベル文学賞を受賞した。



AP/WWP

レイ・"サッチモ"・アームストロング(1901-1971) 20世紀で最も有名なジャズ・ミュージシャン。卓抜なトランペット演奏と独特的の歌い方で、宗教音楽の伝統を米国的大衆文化形式に一変させた。トランペットがジャズには欠かせないソロ楽器として認められるようになったのも彼の力による。また意味のない音を発声するスキヤットという歌い方を発明。これが多くのジャズ・シンガーにとっての基本となった。「この素晴らしい世界」「ハロー・ドーリー！」「聖者の行進」「スターダスト」は、忘がたいサッチモの歌のほんの一部にすぎない。

米国のイコン



AP/WWP

ジョン・ウェイン(1907-1979) カウボーイ神話をつくり上げたのは19世紀のバッファロー・ビル率いる「ワイルド・ウェスト・ショー」だが、これを不朽のものにしたのは、息の長いハリウッドのカウボーイ映画であり、ジョン・ウェインはその最大のスターだった。ウェインは小道具助手として働いていたときジョン・フォード監督に見出され、1939年の西部劇映画「駅馬車」でスターダムにのし上がる。以後、そっけないほど口数の少ないマッチョな男の役を、ハワード・ホークスやジョン・フォードの監督する、ときに哀愁の漂う西部劇映画で数多く演じたほか、第2次大戦を描いた映画にも出演している。



AP/WWP

ロナルド・レーガン(1911-2004) 米国で最も人気のある歴代大統領の1人。ロナルド・ヴィルソン・レーガンは、1981年に大統領に就任した。元ハリウッド俳優で共和党出身のカリフォルニア知事がホワイトハウスのあるじに選ばれたことは、それ自体が変化の表れだった。フランクリン・ルーズベルト以来支持されてきた経済的リベラリズムの人気が衰え、自由市場資本主義の新時代の到来が告げられたのだ。世界各国の指導者たちと連携を取りながら、レーガンは巧妙にソ連の裏をかき、ソ連が経済的にも精神的にも崩壊していくのを見守った。

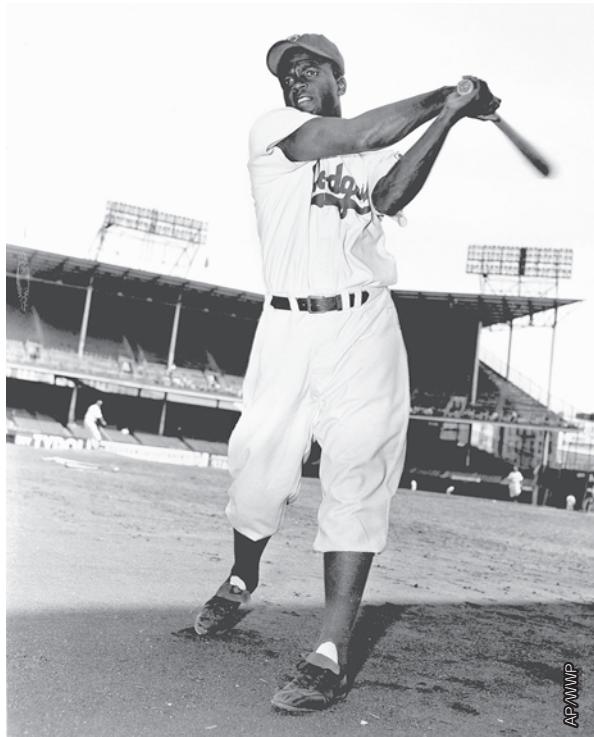


AP/WWP

ジョン・フィッツ杰ラルド・ケネディ(1917-1963) ケネディが米国の大統領だった3年間を、誰もが懐かしそうに振り返るのは、その指導力とさまざまな業績だけでなく、その洗練された魅力、ウイット、カリスマ性のゆえである。テキサス州ダラスで暗殺者の凶弾に倒れるまで、数え切れない人々を奮い立たせ感動させた。1962年のキューバ危機に際してはソ連に敢然と立ち向かったが、ソ連と協力して核軍縮への先鞭をつけた。ケネディの残した遺産には、「進歩のための同盟」や「平和部隊」などがある。

米国のイコン

ジャッキー・ロビンソン(1919-1972) ジョージア州の物納小作人の家に生まれたジャック・ルーズベルト・ロビンソンは、初のアフリカ系米国人の大リーガーとして活躍し、米国プロスポーツ界の人種差別撤廃を促した。その功績をたたえて、彼の背番号42は大リーグ全チームの永久欠番となっている。この背番号を再びほかの選手がつけることはない。1949年ナショナル・リーグのMVPに選ばれ、1962年には野球殿堂入りを果たした。



AP/WWP



AP/WWP

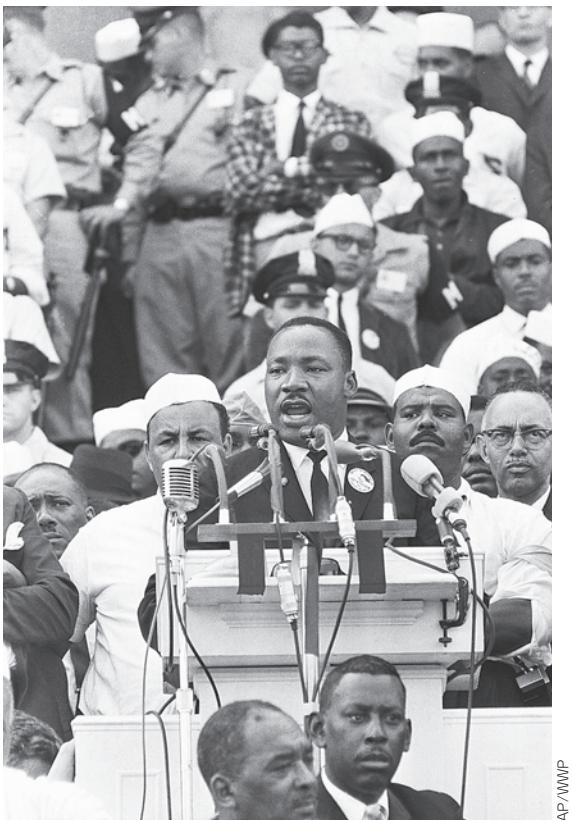
マリリン・モンロー(1926-1962) 死後40年あまりを経た今でも、マリリン・モンローはグラマー女優の代名詞ともなっている。だが、彼女がイコンとしての地位を勝ち取ったのは、人をとりこにする美貌となめかしい曲線のせいだけではない。1950年代の「紳士は金髪がお好き」や「お熱いのがお好き」などのコメディ映画では女優としての才能も証明してみせた。3度の結婚に失敗したことも含めて、モンローの個人的問題でさえ、ときにハリウッド・スターの別の一面を物語る哀切な悲劇として、人々の記憶に残っている。



AP/WWP

シーザー・チャベス(1927-1993) 「シ・セ・プエデ(やればできる)」が、移民農場労働者の悲惨な状況を改善するために闘った、メキシコ系米国人の労働運動活動家シーザー・チャベスのモットーだった。6,000ドルにも満たない年収でつましく暮らしたチャベスは、マハトマ・ガンジーやマーティン・ルーサー・キング・ジュニアと同じように、非暴力的手段を用いて目的を達成しようとした。チャベスの実践した断食やボイコット、ストライキはあらゆる層の共感を呼び、人々が彼の創設した「米国農場労働者組合」と低所得者のための社会的公正を支援するきっかけとなった。

米国のイコン

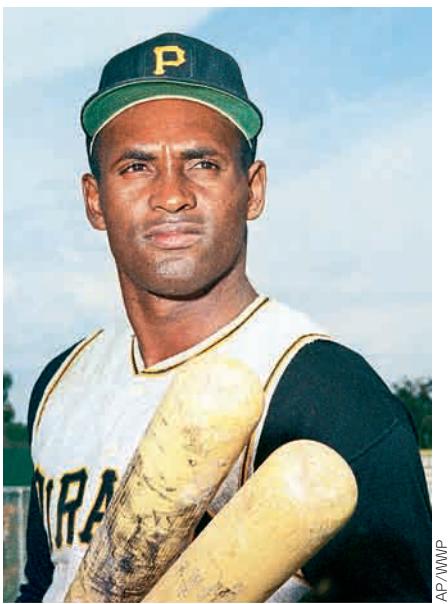


マーティン・ルーサー・キング・ジュニア(1929-1968) 米国の公民権運動(1957-1968)において最も影響力のあった指導者。牧師と教師の両親のもとに生まれたキングは、非暴力的なモントゴメリーバス・ボイコット運動を指導した。功績はいろいろあるが、とりわけ1963年のワシントン大行進で行った「わたしには夢がある」で始まる演説はいまでも人々に感銘を与えるだろう。ノーベル平和賞の最年少受賞記録はいまだ破られていない。暗殺の銃弾に倒れはしたが、「すべての人間は平等につくられている」との確かな兆しをつくった彼の遺産は存在しつづけている。



AP/WWP

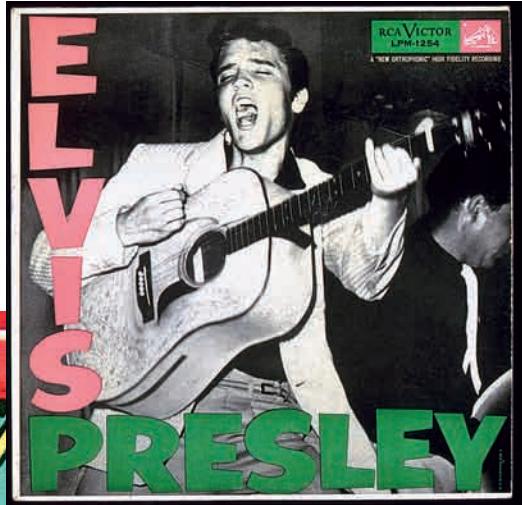
トニ・モリソン(1931-) 本名クロウイ・アンソニー・ウォフォード。オハイオ州生まれ。作家、編集者、教師として輝かしいキャリアを持つ。長編小説「ビラヴド」に対する1988年のピュリツァー賞、そして1993年のノーベル文学賞を初めとして、多数の賞を受賞している。その小説にはブラック・アメリカの豊かな表現力がいきいきと描き出される。またトニ・モリソンは自らの影響力を積極的に利用して、黒人作家たちの作品の発表を後押ししている。



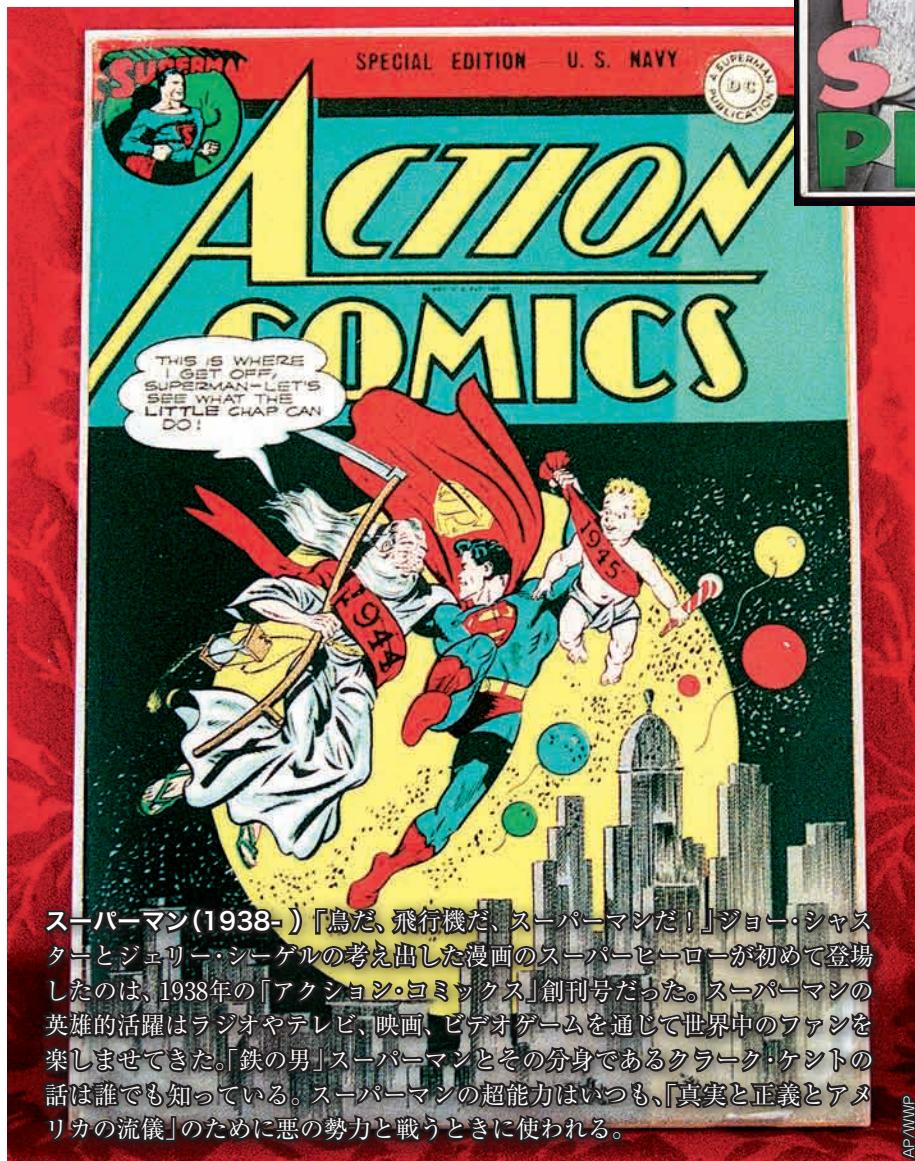
ロベルト・クレメンテ(1934-1972) 南北アメリカのファンたちは、プエルトリコ出身のクレメンテが成し遂げた野球選手としての偉業と彼の人道的活動を、今も親しみを込めて思い出す。1971年のワールド・シリーズで、クレメンテの所属するピッツバーグ・パイレーツはボルティモア・オリオールズと全7試合を戦い、クレメンテは大活躍してチームを優勝に導き、シリーズのMVPに選ばれた。ニカラグア地震の被災者救援物資を運んでいた飛行機の墜落事故で悲劇的な最期を遂げたが、野球殿堂入りした最初のヒスパニック系米国人となった。

米国のイコン

エルビス・プレスリー(1935-1977) ロックンロール・ミュージシャンのプレスリーは、1950年代から死去するまでスーパースターとして一世を風靡した。レコードやCDの売り上げは史上屈指。ダックテールの髪型と独特の情熱的な歌い方が特徴だったが、トラブルも多く、薬漬けの生涯を送った。プレスリーの死後、ジミー・カーター大統領は「彼の音楽と人間的魅力は、白人のカントリーと黒人のリズム・アンド・ブルースのスタイルを融合させ、米国大衆文化の様相を永遠に変えた」と賛辞を述べている。



AP/WWP



AP/WWP

スーパーマン(1938-) 「鳥だ、飛行機だ、スーパーマンだ！」ジョー・シャスターとジェリー・シーゲルの考え出した漫画のスーパーヒーローが初めて登場したのは、1938年の「アクション・コミックス」創刊号だった。スーパーマンの英雄的活躍はラジオやテレビ、映画、ビデオゲームを通じて世界中のファンを楽しませてきた。「鉄の男」スーパーマンとその分身であるクラーク・ケントの話は誰でも知っている。スーパーマンの超能力はいつも、「真実と正義とアメリカの流儀」のために悪の勢力と戦うときに使われる。

AP/WWP



AP/WWP

モハメド・アリ(1942-) アリは1964年にソニー・リストンを倒してヘビー級ボクシングの世界チャンピオンになった。

1981年に現役を引退するまで、舞うように軽やかな素早いフットワークで、ボクシングに大変革をもたらす。だがアリは、政治的信念を歯に衣着せずにすばざば言ってのける男として世界によく知られている。世界チャンピオンのタイトルを保持している間にイスラム教に改宗。1967年、ベトナム戦争の真っ最中に米国陸軍への入隊を拒否し、起訴された上にタイトルを剥奪された。結局、連邦最高裁判所は、アリの宗教的理由に基づく徴兵拒否の権利を認める判決を下した。

米国のイコン

オプラ・ウィンフリー(1954-) 屋内にトイレもついてないミシシッピの農場で育ったオプラ・ウィンフリーは、米国のテレビにおそらく最も大きな影響力を持つ人物となり、また世界有数の大金持ちの女性となった。19歳のとき、テネシー州ナッシュビルのテレビ局で女性初、黒人初のニュースアンカーに起用される。1988年には、彼女の司会するシカゴのトークショーが全国に放映されるようになり、以来ウィンフリーの人気は急上昇し、世界中に波及した。またプロデューサーや雑誌出版者としても成功を収めている。



AP/WWP



AP/WWP

ヨーヨー・マ(1955-) 中国系米国人のチェリスト。4歳のときにパリで音楽のレッスンを始め、その後ニューヨークに移住。世界各地で演奏活動を行い、50枚以上のアルバムを発表し、米国のレコーディング業界から贈られるグラミー賞を15回も受賞している。現代における世界有数のソリストと評価されるヨーヨー・マのレパートリーは、バッハの「無伴奏チェロ組曲」からアルゼンチン・タンゴ、そして中央アジアを横断する古代通商路に沿って異文化の芸術がどう伝播したかに光を当てた最近の試み、「シルクロード・プロジェクト」に至るまで、実に幅広い。

米国のイコン



ミッキー・マウス(1928-) みんな知っている米国の映画スターの1人。最初のトーキー・アニメ「蒸気船ウィリー号」でスクリーン・デビューを果たした。漫画家ウォルト・ディズニーが生み出したミッキーは、全米横断鉄道に乗って一大エンターテインメント帝国の基礎を築いたネズミなのだ。たくさんの漫画やアニメ映画「ファンタジア」のミッキーのこっけいな行動は、世界のどこにいても人気を集めることが証明された。のちに短気なドナルド・ダックやドジなグーフィも登場するが、ミッキーはディズニーから生まれた長い歴史をもつ最初のキャラクターだった。

タイガー・ウッズ(1975-) 最近のゴルフ界では最高のプロ・ゴルファーとして広く認められているエルドリック(タイガー)・ウッズは、米国陸軍中佐の父親とタイ人の母親との間に生まれた。子供のころからのニックネーム「タイガー」は、亡き父の戦友にちなむ。16歳でプロ・トーナメントにデビュー。2001年にはマスターズ・トーナメント2度目の優勝を飾り、4大メジャー大会の連覇という偉業を成し遂げた初のゴルファーとなった。

スティーブン・ジョブズ(1955-2011) アップル・コンピューター社とピクサー・アニメーション・スタジオのCEO。カリフォルニアで育ち、大学を短期間で退学。1976年、友人のスティーブ・ウォズニアクとアップル・コンピューター社を立ち上げる。1986年には同社を退いて新しい会社をつくったが、そこも1996年にアップル社に買収された。ジョブズは、アップル社の小型音楽プレイヤーiPodの成功と、ピクサー・スタジオの「トイ・ストーリー」などの映画の大ヒットにより、革新的なビジネスマンとして歴史に名を刻むであろう。

ウィントン・マルサリス(1961-) 同世代のジャズ・ミュージシャンの中では最も有名なトランペッター。ウィントン・マルサリスは、ニューオーリンズで生まれ育った。1978年、ジュリアード音楽院で学ぶためにニューヨークに移り、市内でミュージシャンとしての活動を開始。続いて、ドラマのアート・ブレイキー率いる独創的な小グループとツアーに出た。現在、リンカーンセンター・ジャズ・オーケストラの音楽監督を務め、演奏や作曲をしながら世界各地をまわる。批評家のスタンリー・クラウチは「マルサリスは仲間のミュージシャンや聴衆に音楽の真髄を伝えるのが本当に好きなのだ」と書いている。



ミシェル・クワン(1980-) フィギュア・スケートの世界選手権で5度の優勝を果たし、米国選手権では9度優勝したミシェル・クワンほどよく知られたフィギュア・スケート選手はいないだろう。カリフォルニアに生まれ(両親は中国生まれの中国人)、5歳でスケートを始めた。ショート・プログラムでもロング・プログラムでも、クワンの大胆なジャンプや流れるような芸術性はファンを魅了してきた。とはいっても、1つだけ逃しているタイトルがある。オリンピックの金メダルだ。銅や銀は取っているのだが、2006年冬季オリンピックもけがのため欠場を余儀なくされた。



AP/WWP

米国史の画期的事件



「教会へ行くピルグリムたち」ジョージ・ブラートン画。1867年。初期のイギリス人入植者の生活の一場面 AP/WWP, National Gallery of American Art

1565 セント・オーガスティン（フロリダ）設立—最も古い都市

1607 ジェームズタウン（バージニア）定着

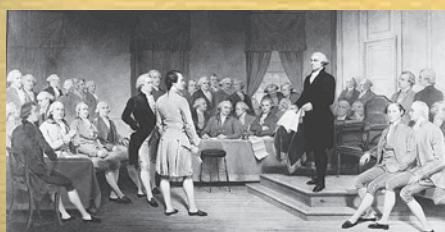
1620 ピルグリムたちがマサチューセッツに上陸（メイフラワー盟約）

1775-83 独立戦争

独立宣言採択 1776

連合規約採択 1777

アメリカ合衆国憲法発効 1788



憲法制定会議終了間際のクライマックスを描いた「憲法制定会議で演説するジョージ・ワシントン」ジュニアス・ブルータス・スタンズ画。1856年 AP/WWP



ジョージ・ワシントンの兵士が13個の星が付いた星条旗を掲揚する
©North Wind/North Wind Picture Archives

1803 ルイジアナ買収

1812-14
1812年戦争



ルイジアナ買収は、1803年当時の合衆国の面積を事実上2倍にした
©North Wind/North Wind Picture Archives

モンロー主義 1823



合衆国憲法修正19条の批准への支援を求めて、スザン・B・アンソニーの言葉を掲げた垂れ幕を持つ全米女性党の幹部たち
AP/WWP

1846-48 米墨（対メキシコ）戦争

1846 英国との条約により北緯49度線に沿ったオレゴン・カントリーの合衆国編入

1861-65 南北戦争

1863 奴隸解放宣言

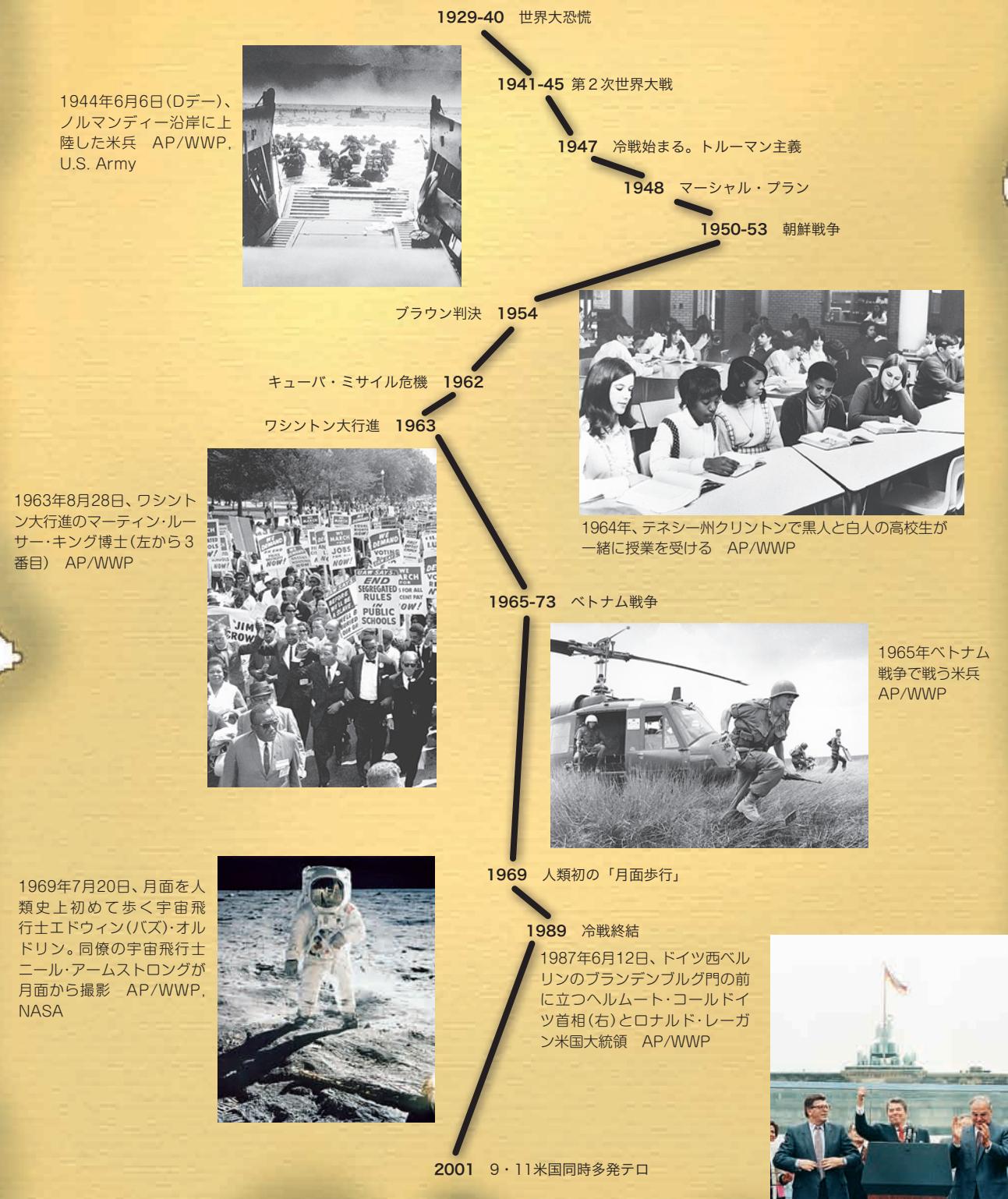
1865-77 再建期

1898 米西（対スペイン）戦争

1917-18 第1次世界大戦

1919 女性参政権

米国史の画期的事件



米国の簡単ガイドツアー

米国人の暮らしは50州のどこも似たような面が多いのだが、地域の違いに注目すれば、この広大な国の複雑さがわかるかもしれない。国務省の電子ジャーナルを担当している外交官リチャード・ハッカビーが各地域とその違いについて1つの見方を紹介する。この記事はハッカビーがフランスと韓国とコソボで講演した話から引用した。

すべての米国人が「一枚岩」の文化に融けこんで、考え方も食べ方も話し方も画一的になっているのに、今さら米国の地域的違いについて話すのは意味がないという考え方もある。確かに、米国でマクドナルドやバーガーキングやピザハットが食べられない所はほとんどない。どこに住んでいても、ショッピング・モールのウォルマートやギャップやフットロッカーで、さほど違いのない商品を買うことができる。しかし、だからといって地域的特徴は昔の神話になってしまったといえるだろうか。わたしはそうは思わない。

根強い地方文化



ブレンハイム・ジンジャーエールには、いくつかの種類がある

Courtesy of Blenheim Bottlers

まずは食べ物の話から。米国全土で標準化された食べ物が多いのは事実だ。どこへ行っても同じブランドの冷凍ピザが買える。アラスカからフロリダまで、シリアルやキャンディ・バーなどの食品が同じパッケージで売られている。果物や野菜の種類や品質も、州によってそれほど変わりはない。だが、マサチューセッツやイリノイでハッシュパピー(油で揚げたコーンフレッドのようなもの)やグリッド(挽いたトウモロコシの粉をゆでて調理したもの)を出されることは珍しいが、ジョージアなどの南部では普通の食べ物だ。コカコーラやペプシコーラやセブンアップはどこでも手に入るが、南カリフォルニア以外でブレンハイム・ジンジャーエールを見つけるのは不可能に近い。シカゴのピザ(深皿で焼いた皮の厚いピザ)はニューヨークのピザとはまるで違う。わたしはニューオーリンズでワニ肉の料理を食べたが、米国のほかの地方ではお目にかかったことがない。どこの地方でもタコベルのチェーン店でメキシコ料理が食べられるが、テキサスのテクス・メクスはいわゆるメキシコ料理とは大違い。その土地独特のホットドッグがあるところも多い。

わたしはサウスカロライナ西部の丘陵地帯で育った。どの家庭料理にも何らかの形でジャガイモとパンが付いていた。大学を卒業して最初に働き始めたのがサウスカロライナの海岸沿いの低地地方だった。そこではほとんどどの食事にも何らかの形でライスが添えられていたのでびっくりした。そのライスもまったく違う方法で調理されていた。煮るのではなく蒸すのである。その後、サウスカロライナ北東部のピーディー川流域に移ったとき、初めてチキン・ポグという料理を耳にした。ライスに細かく切った鶏肉を混ぜて粗挽きの黒胡椒で調理した一品だ。もうおわかりだろう、地域によって——地域間だけではなく、小さな1つの州の中でさえ——食べ物の違いは間違なく存在するのだ。

もう1つの違いは言葉である。米国英語が標準的に使われてはいるものの、話し方は米国のどこにいるかによって違う。南部人はゆったりした話し方になりがちで、母音を延ばすその特徴は「サザン・ドロール」と呼ばれる。中西部の人たちは



Courtesy of UNO Chicago Grill

伝統的な「シカゴ・ピザ」は、たくさんの詰め物をし、深皿で焼く

たことがある。彼はそれを「バーナー」と呼んでいた。西部の言葉にはスペイン語がたくさん混じっていて、その多くは全国に普及している。また中西部の一部やペンシルベニア州ではまだ多くのドイツ語が使われている。1985年の映画「刑事ジョン・ブック——目撃者」を見ると、そうした例に出会う。

地域による違いは、それほど明確ではなくても物の考え方や見方などにも表れる。例えば、外国の出来事に対する注目度だ。大西洋に面している東部では、ヨーロッパや中東やアフリカで起きていることに関心を寄せる新聞が目立つ。西海岸では、アジアやオーストラリアの事件に焦点を合わせることが多い。

プライバシーの尊重や個人主義、個人の自立の重視といった考え方も含めて、米国人に共通する特徴が多い。しかし多くの米国人は、ニューイングランドなら独立独行、南部なら親切なもてなし、中西部なら健康志向、そして西部なら気さくさ、といったように、気風にも地域性があると考えている。

次のセクションでは、例えば定住パターンなど、こうした地域の違いをつくり出した地理的特徴や歴史的影響をかいつまんで紹介する。

だが、各地域に焦点を当てる前に、米国全体の特徴をつかんでおくべきだろう。米国は、国土面積ではロシア、カナダに次いで世界第3位、人口でも中国、インドに次ぐ世界第3位を占める。どのくらい大きいかというと、端から端まで横断するのに車で5日間かかるくらい大きい。それも、ハワイと一番広い州であるアラスカを入れないので話だ。

aを「フラット」に発音し、ニューヨークではユダヤ人の多さを反映して、schlepp(引きずる)やnosh(スナック)などイディッシュがいくつか入り込んでいるという特徴がある。ボストン生まれやブロンクス育ちは特徴のあるアクセントですぐにわかるし、「バー・トーク」という南カリフォルニアで始まったティーンエイジャーのスラングやしゃべり方を知っている人も多いだろう。場所の名前や、特定の民族グループが集まって住んでいる地域で使われる言葉には、移民の影響がはっきりと表れているのがわかる。ウィスコンシン州のラファイエット郡、ルイジアナ州のバトンルージュ、サウスダコタ州のウーンデッドニー、カリフォルニア州のサンタクルーズがその例だ。

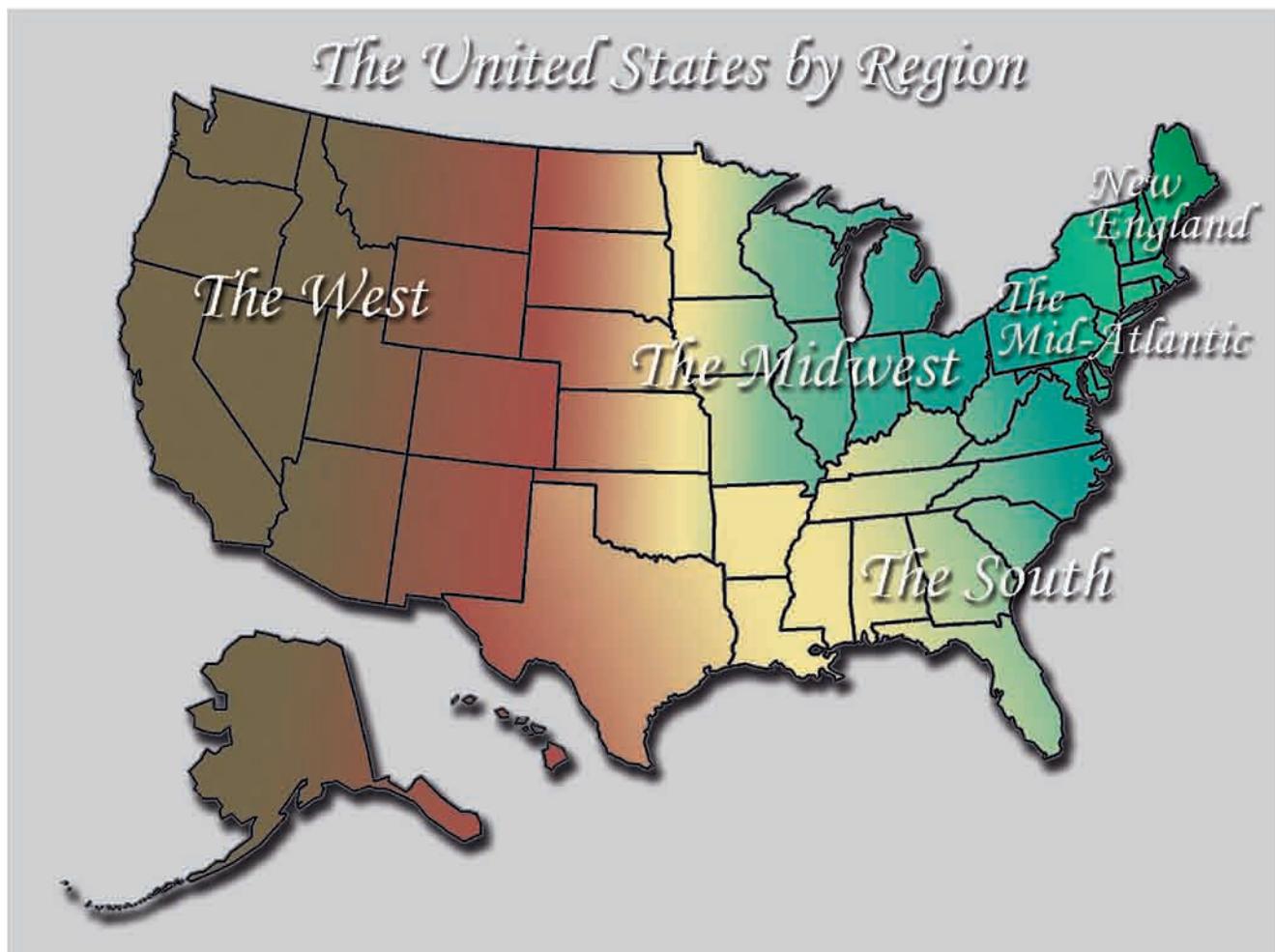
ボキャブラリーも地域によって違う。大学時代、わたしがほかの地方から来た友だちにレンジの「目(eye)」が動かないと言ったら、まったく通じなかつ

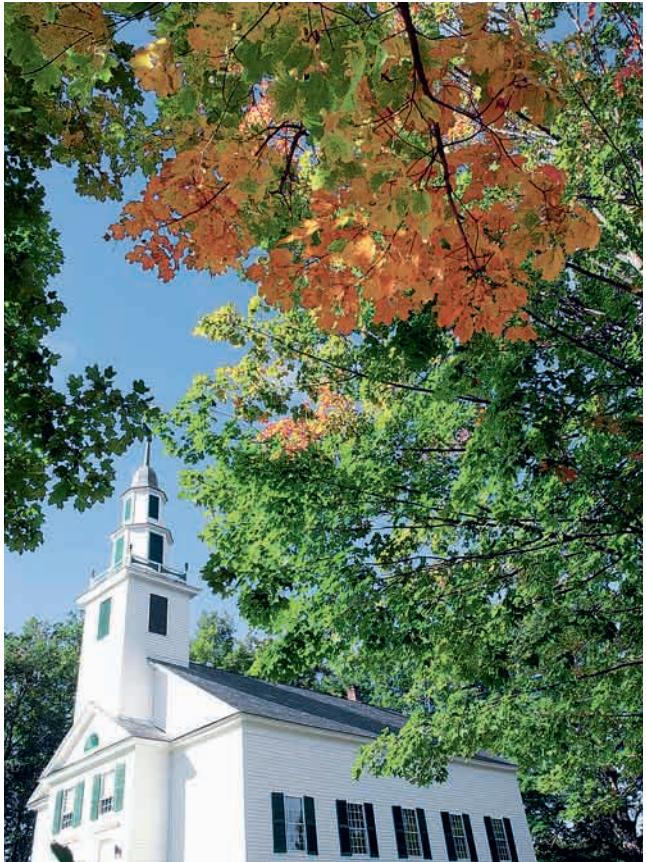


大盛りのフィデオ・コン・ポーリョ(チキン入りパスタ)。ライスとインゲン豆のフリホーレス・レフリートス、レタス、トマト、タマネギが添えられている。典型的なテキサス流メキシコ風料理

地域について

米国を地域に区分けする方法はいろいろある。ここでは、ニューイングランド、大西洋岸中部、南部、中西部、西部という、昔からの基本的区分を採用した。これは公式の区分ではないことを念頭に置いていただきたい。下の地図でもわかるように、この区分は完全とは程遠く、特徴といっても隣の地域と混じり合っていることが多い。都市と文学者のリストは決して十分とはいえないが、ここでは簡単な紹介にとどめる。今号の最後に掲載したインターネットのリンク・リストを参照し、各サイトにアクセスすればもっと詳しい情報が得られる。





バーモント州イースト・モンペリエの「オールド・ミーティング・ハウス(旧礼拝堂)」のそばで、秋の色に染まり始めたカエデの葉

ニューイングランドは地理的には5地域のうち最小の地域で、肥沃な農地や温暖な気候に恵まれた広大な土地があるわけではないが、それでも米国の発展において重要な役割を果たした。17世紀から19世紀の半ばごろまで、ニューイングランドは米国の中核と経済の中心だった。

ヨーロッパからニューイングランドに入植した初期の移民は、英國の保守的なプロテスタン트で、多くは宗教的自由を求めてやってきた。彼らはこの地域に独特の政治形式を定着させた。教会の長老たちの会議から発展したタウン・ミーティングである。住民はこの会に集まってその日の問題を話し合った。資産を持つ男子のみが投票できたが、タウン・ミーティングのおかげで、ニューイングランドの人々には当時としては珍しく高水準の政治参加がもたらされた。こうしたミーティングは、ニューイングランドの多くのコミュニティで現在でも機能している。もちろん、今では女性も参加している。

ニューイングランドでは、南部のように広い区画で農業を営むのは難しかった。そのため1750年頃には、多くの定住者がほかの道を探し始めた。そして地域の主力産業となったのが造船、漁業、交易である。商取引においては、ニューイングランド人は勤勉で抜け目なく、堅実で創意工夫の才があると評判になった。こうしたニューイング



AP/WWP

ニューハンプシャー州ハノーバーにあるダートマス大学で、芝生の上を歩く学生たち。1769年に創立されたリベラル・アーツ・カレッジの私立大学で、名門アイビーリーグの1校である

スト、さらにハリエット・ビー・チャーチ・ストウの故郷でもある。ストウの「アンクル・トムの小屋」は奴隸廃止運動にはずみをつけたといわれる。

初期のニューイングランド定住者の一部が西へ移住する一方、カナダ、アイルランド、イタリア、東欧からの移民が入ってきた。住民が変わっているにもかかわらず、初期のニューイングランド精神の多くがまだ残っている。それはスモールタウンの特徴でもある簡素な木造家屋や白い教会の尖塔、大西洋沿岸に点在する伝統的な灯台に見てとれる。

ランド気質は、19世紀前半に産業革命の波が到来したときに役に立った。マサチューセッツやコネティカット、ロードアイランドなどに、衣類やライフル銃、時計の工場が次々に建てられたが、その事業資金は米国の金融の中心だったボストンで調達された。

ニューイングランドはボストン交響楽団やボストン美術館のような名物となる団体を擁して、常に活発な文化生活を支えてきた。教育もこの地域の最強の遺産だ。一流大学がそろっていることでは他の追随を許さない。トップクラスを挙げれば、ハーバード、イエール、ウェルズリー、マウント・ホールヨーク、ウィリアムズ、アマースト、ウェスレヤンなどの大学がある。

ニューイングランドで発表された歴史的に重要な文学作品は、ソローの「ウォールデン——森の生活」だ。この地域は詩人のエミリー・ディキンソンやのちのロバート・フロ



AP/WWP

ロードアイランド州ニューショアハムの小島ブロック・アイランドにある北の灯台。この地方は観光客の憩いの場となっており、毎年数万人が訪れる



AP/WWP

マサチューセッツ州ローワエルの「ブーツ紡織工場」。産業革命の最盛期には年間9万9,500キロメートルの織物を生産していた。現在は博物館となっている



AP/WWP

メイン州スカーバラの店主ピーター・ウォルシュが、水槽から取り出したロブスターを見せる。メイン産ロブスターは世界的に有名

ニューイングランドの名物には、クラムチャウダー、メイン州のロブスター、バーモントのメープル・シロップ、七面鳥料理、ボストン・ベークドビーンズ、ボストン・タリームパイがある。



ペンシルベニア州エリーを出て、ニューヨーク港の「自由の女神像」のそばを通過する2本マストの帆船
ナイアガラ号

役目を果たした。ニューイングランドと南部の植民地との間に位置するフィラデルフィアは、最初の13植民地の代表が集まった「大陸会議」の開催地となる。独立戦争はこの会議で準備され遂行された。フィラデルフィアは1776年の独立宣言と1787年の合衆国憲法の誕生地でもある。米国の首都が最初に置かれたのはニューヨーク・シティ、次いでフィラデルフィアに移された。

二 ニューヨーク州が19世紀の米国
二 拡張に頭脳と資金を与えたとすれば、大西洋岸中部は筋肉を与えた。この地域の2大州ニューヨークとペンシルベニアは、鉄やガラス、鋼鉄などの重工業の中心地となった。

この地域にはニューイングランドより多様な人々が定住した。現在はニューヨーク州となっているハドソン川渓谷の下流地方にはオランダ人移民が入った。スウェーデン人はデラウェアを行った。英国のカトリック教徒はメリーランドに拠点を定め、英國プロテstantの一派「フレンド派(クエーカー)」はペンシルベニアに落ち着いた。やがて、すべての定住者が英國の統治下に入るわけだが、この地域はその後も、さまざまな国から渡ってきた人々を引きつけた。大規模なドイツ人コミュニティもその一例である。

初期の定住者は農民と商人が多く、この地域が北部と南部の架け橋としての



AP/WWP

世界で最もよく知られた交差点の1つ、ニューヨークのタイムズ・スクエア前の車の波



AP/WWP

メリーランド州ソロモンズのパトクセント川で桁網を仕掛け、船上でカキをより分ける漁師ジョー・ストーン

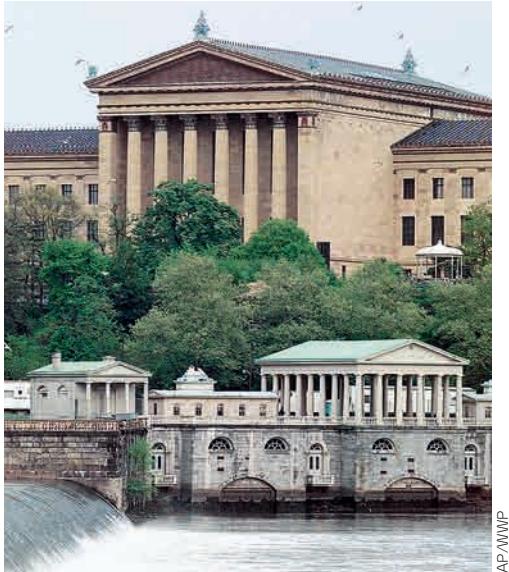
この地域の歴史的重要性は、米国陸軍士官学校がニューヨーク州ウェストポイントに、海軍士官学校がメリーランド州アナポリスにあることからも明らかだ。またニューヨーク港のエリス島は、20世紀初めにやってきた大量の移民の入国ポイントだった。

地域内に重工業が広がるにつれ、ハドソン川やデラウェア川などの河川が重要な通商航路に変わった。水路沿いにある都市——ハドソン川のニューヨーク、デラウェア川のフィラデルフィア、チェサピーク湾のボルティモア——は劇的な発展を遂げた。ニューヨークは今でも米国最大の都市で、米国の金融の中枢、文化の中心となっている。



AP/WWP

メリーランド州の州都アナポリスには、米国海軍士官学校がある。写真の右下に写っているのが知事公邸。左に写っているのは1692年創立のセント・アンズ監督教会。現在の建物は1859年に完成した



ニューヨークには文化的施設や団体が数え切れないほどあるが、特にメトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・シティ・バレエ、メトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館などが有名。この地域出身の文学界の巨匠としては、短編作家で詩人のエドガー・アラン・ポー、詩人のウォルト・ホイットマン、劇作家のアーサー・ミラー、現代作家のジョン・アップダイクやフィリップ・ロスを挙げられる。

ニューイングランドと同様、大西洋岸中部地域も多くの重工業が他地域へ移転する変遷を経験してきた。代わって、製薬、通信、サービスといった産業が進出している。

名物といえば、マンハッタン・クラムチャウダー、メリーランドのカニ、フィリー(フィラデルフィア)チーズステーキ・サンドイッチ、チキン・ポットパイ、リンゴ酒、ニューヨークのベーグル、ニューヨーク風チーズケーキがある。

スクール川沿いのフェアモント給水場の上に美術館が見える(ペンシルベニア州フィラデルフィア)。市民に上水を供給するポンプ場として建てられた施設は、歴史的建造物として修復され、観光客に公開されている

南部

バージニア、ウェストバージニア、ケンタッキー、テネシー、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、フロリダ、アラバマ、ミシシッピ、アーカンソー、ルイジアナ、テキサス

主要都市: ジョージア州アトランタ、ルイジアナ州ニューオーリンズ、ノースカロライナ州シャーロット、フロリダ州マイアミ、テネシー州ナッシュビル、テキサス州ヒューストン

文学者: ウィリアム・フォークナー、トマス・ウルフ、ロバート・ペン・ウォーレン、マーガレット・ミッチェル、テネシー・ウィリアムズ、トルーマン・カポーティ、フラナリー・オコナー、アリス・ウォーカー

—— ューイングランドもそうだったが、南部でも最初に住み着いたのは英国のプロテスタントだった。さらにフランスのプロテスタント(ユグノー派)も到来し、主にサウスカロライナに定住した。ルイジアナにフランス人が多かったのは言うまでもない。しかし、ニューイングランドでは本国との違いを強調する風潮があったのに対し、南部人は英國を手本とし見習おうとする傾向があった。とはいっても、独立戦争



テネシー州議会の議事堂はナッシュビルのダウンタウンにある。1779年ノースカロライナからの移住者によって建てられた

AP/WWD



Courtesy of the Mississippi Development Authority/
Division of Tourism

ミシシッピ州ナッシュビル近くのスタントン・ホールは、「オールド・サウス」の時代から残っている数百の大農園主邸宅の一例。「風と共に去りぬ」で理想的に描かれた生活様式がしのばれる



AP/WWP

ハリケーン・カトリーナの被害から立ち直る兆しが見え始めた2005年10月、ルイジアナ州ニューオーリンズ市内のフレンチ・クオーターにあるレストラン「Kポールズ・ルイジアナ・キッチン」の前で演奏する「ストーリービル・ストンバーズ・ブラスバンド」



AP/WWP

サウスカロライナ州チャールストンで開催された「2004年ス皮ート・フェスティバルUSA」のオープニング・セレモニー。舞台に立っているのは「ベニ・パビリオン」の役者たち

の指導者には南部人が傑出していたし、初代から5代までの大統領の4人までがバージニア出身だった。

岩の多いニューイングランドや、肥沃な盆地に自営農家が育っていった大西洋岸中部とは対照的に、南部は、大規模農場のプランテーションで北部やヨーロッパの市場に向けて生産する綿花やタバコなど労働集約的農業に大きく依存していた。プランテーション経営者はそれに必要な労働力を、アフリカから連れてこられた奴隸に頼った。しかし奴隸制は論争を呼ぶようになり、北部と南部の分裂を招いた。奴隸制は、北部人にとって社会的倫理に反することだった。南部人にとっては自分たちの生活様式に欠かせない制度だった。1861年、ついに南部11州が「アメリカ南部連合国」という新国家の設立を目指して米国から離脱した。これによって南北戦争が勃発し、南部連合が敗北して奴隸制は廃止された。この内戦の傷が癒えるまでには数十年かかった。



AP/WWP

ジョージア州アトランタのセンテニアル・オリンピック公園。CNNセンター最上階からの眺望。公園の向こうに高層ビルがそびえる

それでも、時を経て南部人もこうした対立を受け流せるようになり、20世紀後半には、「ニュー・サウス」のスローガンの下に地域の新しい誇りが表現されるようになった。そして南部は再び国内政治に影響力を持ち始めた。1976年以降の大統領は、ロナルド・レーガン以外は全員南部から輩出されている。ジミー・カーターはジョージア、ジョージ・ブッシュと息子のジョージ・W・ブッシュはテキサス、ビル・クリントンはアーカンソーの出身だ。また、サウスカロライナ州チャールストンで毎年開催される「スポリート・フェスティバル」や、ジョージア州アトランタで開かれた1996年夏のオリンピックなど、国際的なイベントも行われるようになった。

今日の南部は、製造、銀行、運輸などの産業が栄える豊かな地域に発展している。都市には高層ビルが林立する。温暖な気候のおかげで、米国の他地域やカナダから多くの引退者が移り住んでいる。引退者であれ、単に質のいい生活を求めている人々であれ、これら「サンベルト」にやってきた新しい住民たちは、ビジネス・チャンスと南部の伝統的生活様式や独特の趣きが現代風にミックスされた文化を発見している。

南部の文学、とりわけ20世紀における文学的豊かさは伝説的で、ミシシッピの生活を描いたウィリアム・フォークナーの小説や、テネシー・ウィリアムズの劇作、フラナリー・オコナーの短編小説は特に有名。

名物料理には、南部風フライドチキン、グリット、バーベキュー、ルイジアナのフランス料理やクレオール料理がある。



中西部の中心地、イリノイ州シカゴの高層ビル群。右下に見えるのはアメリカンフットボール・チーク、シカゴ・ベアーズの本拠地ソルジャー・フィールド



ミズーリ州ハンニバルのこの通りは、マーク・トウェインの「トム・ソーヤー」シリーズで有名になった

中 西部は文化の交差点だ。1800年代初め、東部の住民は耕作に適した土地を求めて移動し始め、しばらくするとヨーロッパからの移民が東海岸を飛び越えて直接内陸へ向かうようになった。最近では、移民人口が増え続け、移住者の多様化も進んでいる。ネイティブ・アメリカンの人口も多い。土壤が肥沃な中西部は小麦やトウモロコシなど穀類の豊富な収穫が望め、まもなく米国の「パンかご」と呼ばれる穀倉地帯となる。

中西部の大部分は土壤の肥えた平地で、広大な小麦畑にはうってつけの条件を備えている。ミシシッピ川は、入植者たちを新しい住みかへ、また食料を市場へと運ぶ地域のライフラインの役目を果たした。この川に触発された2つの古典的名作



AP/WWP

サウスダコタ州ドスマットに近い「インガルズ農場」。小麦畑、家畜小屋、農家のある、中西部の典型的風景



ミネソタ州ミネアポリス市内、レイクストリート・ミッドタウン駅へ向かうライトレールの電車

が生まれている。ミズーリ生まれのサミュエル・クレメンズがマーク・トウェインというペンネームで書いた「ミシシッピの生活」と「ハックルベリー・フィンの冒險」の2作である。中西部出身の作家としては、ほかにも小説家のアーネスト・ヘミングウェー、トニー・モリソン、詩人のカール・サンドバーグ、マヤ・アンジェロウ、そして米国人初のノーベル文学賞に輝いたシンクレア・ルイスがいる。

中西部人は開放的で人なつこく、率直だと賞賛される。この地域の中心地であるイリノイ州シカゴは、米国第3の大都市。五大湖の主要港でもあり、鉄道や航空路の連結点として国内各地、さらには世界各地とつながっている。都心のど真ん中にそびえる高さ447メートルのシーザーズ・タワーは世界有数の超高層ビルだ。ほかにも特筆すべき都市はいくつかあるが、それより、この地域は昔ながらのスモールタウンで最もよく知られる。中西部はときに「米国のハートランド」と呼ばれる。

名物料理としては、「シカゴ・スタイル」のピザと、この地域に受け継がれてきた多くのドイツ、スカンジナビア、東欧の料理がある。



西部

ニューメキシコ、アリゾナ、コロラド、ワイオミング、モンタナ、ユタ、カリフォルニア、ネバダ、アイダホ、オレゴン、ワシントン、アラスカ、ハワイ

主要都市: カリフォルニア州ロサンゼルスおよびサンフランシスコ、コロラド州デンバー、ネバダ州ラスベガス、アリゾナ州フェニックス、ニューメキシコ州アルバカーキおよびサンタフェ、ワシントン州シアトル、ハワイ州ホノルル

文学者: ジョン・スタインベック、レイモンド・カーバー、ジェームズ・ウェルチ、ウォーレス・ステグナー、コーマック・マッカーシー、レスリー・マーモン・シルコウ



アリゾナ州ツーソンの近くに建つ「サン・ゼビア・デルバク伝道院」は1797年に完成した

米国人は長い間、西部を最後の未開拓地だと思ってきたが、実は、カリフォルニアには中西部より早い入植の歴史がある。スペイン人宣教師たちがカリフォルニア沿岸の数か所に伝道院を建設したのは、独立戦争の勃発する数年前のことだった。19世紀には、東の多くの州に先駆けて、カリフォルニアとオレゴンが米国に加わった。

西部は、北の緑豊かな森林から南の広大な砂漠にいたるまで、スケールの大きな風光明媚の地として知られる。アリゾナの壮



アリゾナ州のグランドキャニオン国立公園で、にわか雨の降ったあとホピポイントにかかる2本の虹



AP/WWP

アラスカ州タルキートナから見たマッキンリー山。登山者はタルキートナから小型機でカヒルトナ氷河まで飛び、そこからこの北米最高峰の山に登る



AP/WWP

1858年に建設されたコロラド州デンバーは、標高が約1マイルあるため「マイル・ハイ・シティ」と呼ばれ、今では周辺人口200万人以上の大都会に発展した。主な産業は、通信、公益事業、運輸など



AP/WWP

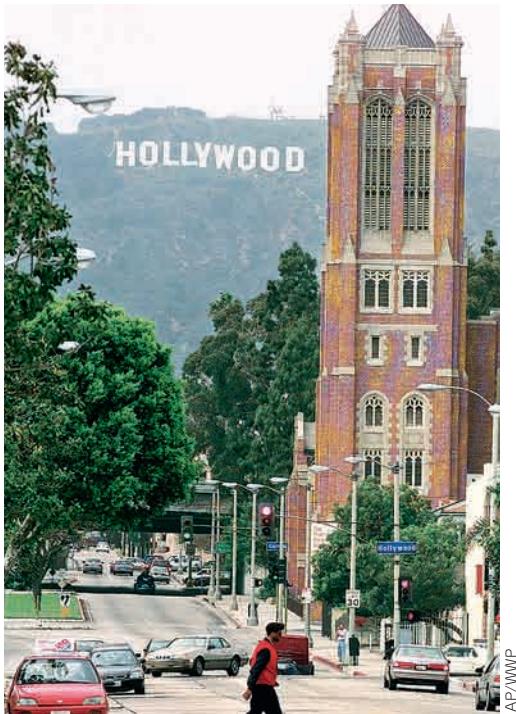
ワシントン州シアトルの高層建築の風景。「スペースニードル」(左)は1962年に開催されたシアトル万博のために建てられた

大なグランド・キャニオン。西部劇映画でおなじみの美しくも荒涼としたモニュメント・バレーはユタ州とアリゾナ州にまたがり、ネイティブ・



人口150万近いアリゾナ州フェニックスは米国第5の都市。1年のうち晴天の日は平均325日

AP/WWP



有名な「HOLLYWOOD」の看板は、ガウアーストリートとハリウッド・ブルバードの交差点を見おろす丘の中腹に立っている



映画「未知との遭遇」で有名なデビルズ・タワーはワイオミング州にある

アメリカンの中で最も人口の多いナバホ族のほか、ホピ族、ズーニー族、プエブロ族、アパッチ族の各居留地がある。

ワイオミング州のデビルズ・タワー（映画「未知との遭遇」で見た覚えがあるかもしれない）や、ユタ州にある世界最大の自然の石橋レインボーブリッジの景観も有名だ。

西部は人口の少ない地方が多く、ヨセミテ、イエローストーン、セコイア、デスバレーなどの広大な国立公園の中にある未開発地は、連邦政府が所有し管理している。米国人はこうした区域を、釣りやキャンプ、ハイキング、舟遊びなどのリクリエーションや、放牧、製材、採鉱といった商業的活動に利用している。

西部の南方の一部は、かつてメキシコ領だった。1846年から48年にかけて行われた米墨戦争の結果、米国がこの土地を手に入れた。その後もメキシコ時代から受け継いだ伝統の影響は根強く続いている。メキシコ系住民が多い。

今や米国第2の都市になったロサンゼルスは、ハリウッド映画産業の



コロラド州ボルダー市に近いフーバー・ダムは、ネバダとアリゾナの州境を流れるコロラド川にあり、高さ221メートル、長さ379メートル。ハーバート・フーバー大統領の名にちなむこの巨大ダムは、水力発電による電力の主要供給源であり、米国とメキシコの農地42万5,000ヘクタールに灌漑用水も供給している

地となり、特に絵画、彫刻、オペラが有名である。遠くから運ばれてくる水のおかげで、いろいろな農作物を栽培できるようになり、この地域の経済の多様化をもたらした。

米国最北に位置するアラスカ州は人口の少ない広大な州だが、住んでいる人々は



ハワイ州ワイキキの海岸で観光客のためにフラダンスを踊る若いダンサー

西部の名物料理は、メキシコ風、その他のラテンアメリカ風、アジア風と、住民の多様性ゆえに実に変化に富んでいる。そしてもちろん、カリフォルニア州サンフランシスコにはフィッシュ・マーケット・ワーフがある。

拠点として最もよく知られる。ロサンゼルスとサンノゼ近くの「シリコン・バレー」の発展によって、カリフォルニア州は米国で最も人口の多い州となった。西部の人口は急速に増えつつあり、とりわけアリゾナ州は暖かい気候を求める引退者が多く移り住む州として、南部の州に引けを取らない。ネバダ州ラスベガスは世界有数のギャンブルの街として名高い。

水不足にたびたび悩まされてきた西部には、コロラド川など河川流域のダムや、「中央アリゾナ・プロジェクト」などの送水路が建設され、かつてのスマート・タウン、アリゾナ州フェニックスやニューメキシコ州アルバカーキといった町も繁栄して、活気に満ちた都会に変身した。ニューメキシコ州のサンタフェとタオスは芸術の中心



ニューメキシコ州サンタフェの「サンタフェ・オペラカンパニー」の団員たち。ベッリーニの「夢遊病の女」のリハーサル中

たくましく、手つかずの自然が広がる土地は国立公園や野生生物保護区として保護されている。ハワイ州は米国の州では唯一、アジア系がヨーロッパ系住民よりも多い。1980年代初め、カリフォルニア州にも大量のアジア人が押し寄せ、主にロサンゼルス周辺に住んでいる。

西部の人々は寛容なことで知られる。人生の再出発を目指して他地域から移ってきた住民が多く、文化がミックスされているせいか、対人関係は「お互いに干渉せずにやっていこう」という傾向が強い。西部の経済は多種多彩で、例えばカリフォルニアは、農業州でもハイテク産業の地でもある。

最もよく知られた西部の作家といえば、「怒りの葡萄」のジョン・スタインベック、オハイオ生まれだがカリフォルニアに移住したゼイン・グレーが挙げられる。Riders of the Purple Sageなどのグレーの小説には、「オールド・ウェスト」の理想像が描かれている。

多くの米国人、1つの米国

最初に述べたように、米国は大きな国である。地理的に変化に富んでいるのは言うまでもない。ニューイングランドや北西部の岩の多い海岸、南東部やカリフォルニア、ハワイの砂浜、両海岸の近くに横たわる山脈、国の中北部に広がる平原、南西部の広大な砂漠、アラスカの凍土帯、ハワイの火山島。それぞれの地域に独特の個性があるのは、そうした地理的理由によるものであり、また、さまざまな人々がさまざまに異なる条件の下で400年余りの間そこに住んできたからである。

国土は広大で、地域は多様性に富んでいるものの、自分たちを「米国人」と呼ぶ人々の間には相違点より類似点のほうが多いことを忘れてはならない。結局のところ、この国の硬貨には「E pluribus unum(多数からできた1つ)」というモットーが刻まれており、それこそ米国人が真剣に受け止めている理想なのだ。

「ほかの国ではたいてい、その国の国民であると確認するのに、すべて両親が誰かとか、どこの地方で育ったかということと関係づけて考えられる」とテキサス選出の上院議員ケイ・ペイリー・ハチソンは最近の講演で述べている。「真の米国人であるということは、どこの出身かということより、何を信じているかということと関係がある。移民が市民権を得るときには、ほかのすべての米人と同じ権利と自由が与えられる。親が米国人でなくとも関係ない。独立戦争で血を流した祖先を見つけるために、はるか昔まで家系をさかのぼることができなくても問題ではない。米国人であることに必要なカギは、いくつかの基本的信念、例えば自己統治の価値観、言論の自由や信教の自由の権利、といった信念を共有することである」



アラスカ州アンカレッジで行われた「ミート・ザ・ワールド」フェスティバルでの韓国系アメリカ人のブース。アンカレッジでは、93の言語が使われている

AP/WWP

移住者が米国について 思うこと

ベラルーシのドキュメンタリー映画監督で、現在はボルティモアのロシア語紙カスカドの社主をつとめるポール・ピックマンは言う。「米国では誰もが異なる。誰もが歓迎される」（ボルティモアサン）

「米国に向かう時、君はお金を稼ぎ、成功することを夢見ている。社会について考えることはない。だがここで数年も暮らせば、これらのことを考え始める」メリーランド州の高級食材チェーン・バルダッчиの物流担当官エルネスト・ディアス（ワシントンポスト）

「われわれは、在米のイスラム教徒のアイデンティティーを大切にする。故国は孫が育つところであり、父祖の眠るところではない」イスラム教広報協議会事務局長サラム・アルーマラヤッчи（サクラメントビー）

「米国には、子供達が立派な教育を受け、いい仕事に就ける素晴らしい機会がある」ウォルマートで働くアルバニアからの移民スザーナ・ホタージ（カンザスシティースター）

「同じ目標を持つ移民で運営される企業のオーナーになること、それが私のアメリカンドリームの1つです」フィリピン系移民で、ワールドトレードセンターの高層階レストラン、ワインドウズ・オン・ザ・ワールドで生き残った従業員でつくる協同組合、50人の共同所有者の1人シリベリオ・ムー（ニューヨークタイムズ）

「多種多様な仕事があり、素晴らしい学校制度が整い、事業を始めるチャンスにもおおいに恵まれ、教育を受け、英語を習得することもできる」ボスニアからの移民ラヒマ・ポルヤレビク（カンザスシティースター）

「移民としてこの地にくる時、あなたはいちばんの賭けに出ているが、事業を始めるとはそういうことだ」バージニアのヒスパニック商工会議所会頭マイケル・ザホアー（ワシントンポスト）

米国の知識人が語る価値

マヤ・アンジェロウ 「多様さの中に美があり、強靭さがある、ということを親が早い時期に若者に教えるべき時だ」

エミリー・ディキンソン 「幸運は偶然のチャンスではなく、労苦の産物である。努力して初めて幸運をもたらす微笑みは獲得できる」

ピーター・ドラッカー 「あなたの未来を予測する最も良い方法は、それを創造することだ」

W.E.B. デュボイス 「今が正にその時だ。明日でもなく、いつかもっと良い時期でもない。最良の仕事が出来るのは、今日だ。未来のいつかある日でもある年でもない」

アメリア・イアハート 「最も困難なことは、行動を起こす決断をすることだ。後は、ただその決断に執着し続けることである。恐れは、張子の虎である。決断したことは、何でもやれる。自分の人生を変え、制御するために行動することも出来る。どのような方法や手順をとっても、それは決断に対する褒賞である」

アルバート・AINシュタイン 「大事なことは、疑うことやめないことである」

ベンジャミン・フランクリン 「熱意と粘りはすべてを克服する」

ラルフ・ウォルドー・エマソン 「人は誰も、その教育の過程において、ねたみは無知であり、人まねは自殺行為である、良かれ悪しかれ自分の分を引き受けなければならない、宇宙は善に満ちているが、一粒の穀物さえ、耕すべく彼に与えられた一画の土地に注がれる努力を抜きにしては自分のものとはならない、と悟るときがくる」

ビル・ゲイツ 「成功したことで、私は巨万の富を得た。巨万の富は、困っている人々を手助けするのに最もふさわしい方法で、その資源をどのように社会に還元したらよいかを考える、という大きな責任をもたらした」

ラングストン・ヒューズ 「夢をしっかり持ち続けよ、なぜなら、もし夢がしぼんでしまえば、人生は翼を傷めて飛べない鳥のようなものだ。人生で、行きたいところにはほとんど何処だって行けることが私はわかった。もし本当にきたければ」

ギャリソン・キーラー 「私が思うには、最も非アメリカ的なことは、『そんなことは言ってはいけない』というものだ」

エドワード・マロー 「説得力を有するには、自分が信用される存在で無ければならない、信用される存在であるためには、信頼されねばならない。信頼されるためには、誠実でなければならない。文字通り簡単なことである」

マーク・トウェイン 「未知のアイデアを持つ人は、そのアイデアが現実のものとなるまでは、変人である」

オプラ・ウィンフリー 「あなたをより高みへと引き上げてくれる人だけで身の回りを固めなさい」

参考資料

米国に関するウェブサイト

一般的な情報

Celebrating America's Freedoms

http://www.va.gov/opa/publications/celebrate_americas_freedoms.asp

This site from the U.S. Department of Veterans Affairs contains “stories about some of America’s most beloved customs and national symbols.” Topics include the Pledge of Allegiance, flag etiquette, the bald eagle, gun salutes, and other patriotic subjects. Useful for planning activities or researching holidays such as the Fourth of July, Flag Day, Memorial Day, and Veterans Day.

CIA World FactBook: United States

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/us.html>

Official source of information about the geography, people, government, economy, communications, transportation, and defense of the United States.

Library of Congress

<http://www.loc.gov/>

From “the largest library in the world,” this site offers access to eight million items online. In addition, through its online catalogs, research guides, and other finding aids, the site provides information on many of the books, recordings, photographs, maps, and manuscripts contained in the library’s collections. Links to a number of useful resources are described in greater detail in entries below.

Smithsonian Institution

<http://www.si.edu/>

Often called “the nation’s attic,” the Smithsonian is comprised of several history, science, and technology museums, as well as art galleries, the National Zoo, a number of research facilities and libraries, and outreach programs. The site provides links to the museums, exhibitions, events, research, and membership information. Visitor’s guides are available in a number of languages, including English, German, Spanish, French, Italian, Portuguese, Russian, Chinese, Japanese, and Arabic.

地理

The 50 States

<http://www.50states.com/>

Provides detailed information about each state. Includes maps of states and capitals as well as state flags, symbols, population, area codes, zip codes, information on major cities, and numerous other facts.

City-Data.com

<http://www.city-data.com/>

Focusing specifically on U.S. cities, this site includes profiles, photos, maps, statistics, geographical data, statistics and other resources. It also includes Top 100 Lists of cities: highest income, least crime, newest houses, most females, shortest commute, best-educated residents, and so forth.

Geography of the 50 States

http://www.netstate.com/state_geography.htm

Click on any state for detailed information about that state, including basic geographical facts, state symbols, famous residents, songs, history, government, newspapers, a message board, and an extensive list of links.

National Atlas of the United States

<http://nationalatlas.gov/>

Using this site from the U.S. Department of the Interior, one can create custom-made maps showing various physical features. Numerous statistics on the population, agriculture, climate, environment, geology and other geographic information are searchable as well.

National Weather Service

<http://www.nws.noaa.gov/>

Part of the National Oceanic and Atmospheric Administration, the National Weather Service provides forecasts, maps, travel warnings, and other information about the climate of the United States.

U.S. Geological Survey

<http://geography.usgs.gov/>

“USGS geographers monitor and analyze changes on the land, study connections between people and the land, and provide society with relevant science information to inform public decisions.” The site provides geography resources from the U.S. mapping agency cooperating with more than 2,000 organizations across the country to provide scientific information for resource managers and planners.

政府•政治

American Presidents

<http://www.americanpresident.org/>

From the University of Virginia’s Miller Center of Public Affairs, this site offers two perspectives on the American presidency: the Presidency in History and the Presidency in Action.

Congressional Directory

<http://www.gpoaccess.gov/cdirectory/index.html>

This official directory features short biographies of each member of the Senate and House, as well as additional data, such as committee memberships and staffs. It also includes officials of other federal departments and agencies, governors, foreign diplomats, and members of the press. The directory is available online from the 104th Congress to date.

Constitution of the United States

<http://www.gpoaccess.gov/constitution/>

“The Constitution of the United States comprises the primary law of the U.S. Federal Government. It also describes the three chief branches of the Federal Government and their jurisdictions. In addition, it lays out the basic rights of citizens of the United States.” This database from the Congressional Research Service provides access to editions and supplements to the text, analysis, and interpretations since 1992.

Core Documents of U.S. Democracy

<http://www.gpoaccess.gov/coredocs.html>

Grouped into cornerstone documents, Congressional, presidential, judicial, regulatory, demographic, economic, and miscellaneous categories,” this online collection contains “the basic Federal Government documents that define our democratic society.” Selected and authenticated by the U.S. Government Printing Office.

GPO Access

<http://www.gpoaccess.gov/>

From agency publications to the Weekly Compilation of Presidential Documents, this portal page from the U.S. Government Printing Office provides access to official information from all three branches of the Federal Government.

State and Local Government on the Net

<http://www.statelocalgov.net/index.cfm>

Using drop-down menus, this searchable and browsable state and local government Internet directory provides “convenient one-stop access to the websites of thousands of state agencies and city and county governments.”

Stateline

<http://www.stateline.org/>

Designed originally for journalists and funded by the Pew Charitable Trust, this site provides “timely tips and research material on state policy innovations and trends.” Topics include state-level issues such as healthcare, tax and budget policy, the environment, and welfare.

The Supreme Court of the United States

<http://www.supremecourtus.gov/>

The official site of the Supreme Court contains detailed information about the history and workings of the Court. Oral arguments, rules, guides, decisions, and opinions are accessible here, as well as a visitor’s guide and other public information.

THOMAS: Legislative Information on the Internet

<http://thomas.loc.gov/>

Free Congressional information has been available through this database since 1995. Materials include the full text of bills, laws, and resolutions; proceedings and proposed legislation; the *Congressional Record*; schedules; calendars; committee information; presidential nominations; treaties; and other government resources. Some earlier materials dating back to 1973 have been added to the database as well.

U.S. Government Manual

<http://www.gpoaccess.gov/gmanual/index.html>

Comprehensive information on the “agencies of the legislative, judicial, and executive branches” as well as information on “quasi-official agencies, international organizations in which the United States participates, and boards, commissions, and committees” is available in the official handbook of the federal government.

This handbook is searchable and browsable, with online editions available from 1995 to the present.

Understanding the Federal Courts

<http://www.uscourts.gov/EducationalResources/FederalCourtBasics/UnderstandingTheFederalCourts.aspx>

“This publication was developed by the Administrative Office of the United States Courts to provide an introduction to the federal judicial system, its organization, and its relationship to the legislative and executive branches of the government.”

歷史

AMDOCS: Documents for the Study of American History

<http://www.vlib.us/amdocs/>

Developed by a professor at the University of Kansas, this chronological listing provides links to approximately 400 documents selected specifically to assist high school and college American history students.

America's Historical Documents

<http://www.archives.gov/historical-docs/>

“The National Archives preserves and provides access to the records of the Federal Government.” This site contains a sample of these records, from some celebrated milestones to some more obscure documents. It also provides links to the National Archives and Records Administration’s home page, additional documents, online exhibits, research tips and tools, and other resources.

American Memory: Historical Collections for the National Digital Library

<http://memory.loc.gov/ammem/>

“American Memory provides free and open access through the Internet to written and spoken words, sound recordings, still and moving images, prints, maps, and sheet music that document the American experience.” Taken from the collections of the Library of Congress and other institutions, these materials “chronicle historical events, people, places, and ideas that continue to shape America.” See, for example, the Learning Page’s “American Memory Timeline” and the “Today in History” feature.

Avalon Project at the Yale Law School: Documents in Law, History, and Diplomacy

<http://avalon.law.yale.edu/default.asp>

“The Avalon Project is dedicated to providing access via the World Wide Web to primary source materials in the fields of Law, History, Economics, Politics, Diplomacy and Government.” External and internal links have been added to facilitate understanding and navigation of the items. The database, which is searchable by author and title or by subject or event, contains over 3,500 full-text documents, most directly related to American history.

Biography of America

<http://www.learner.org/biographyofamerica/>

This telecourse and video series presents American history as a living narrative. Divided into 26 parts, the series Web site provides “an interactive feature related to the subject or the time period of the program . . . a listing of key events of the period, a map relevant to the period, the transcript of the video program, and a ‘Webography’—a set of annotated web links.”

Documenting the American South

<http://docsouth.unc.edu>

Sponsored by the University Library of the University of North Carolina at Chapel Hill, this collection “provides Internet access to texts, images, and audio files related to Southern history, literature, and culture.” Searchable by author, title, subject, and geographically.

History—North America

<http://libguides.rutgers.edu/cat.php?cid=25834>

This comprehensive guide to history resources is compiled by bibliographers at the Rutgers University Libraries. Links to Internet resources, online indexes and databases, bibliographies, major microfilm sets in American history, other library catalogs, and other services are provided. Access to several of the databases is “Rutgers Restricted.”

History Matters: The U.S. Survey Course on the Web

<http://historymatters.gmu.edu/>

“Designed for high school and college teachers and students of U.S. history survey courses, this site serves as a gateway to web resources and offers unique teaching materials, first-person primary documents, and guides to analyzing historical evidence. [The] materials ... actively involve students in analyzing and interpreting evidence.” Created by the American Social History Project at City University of New York and the Center for History and New Media at George Mason University, this site contains resources, such as an annotated guide to “the most useful websites for teaching U.S. history and social studies.”

Outline of U.S. History

<http://www.america.gov/publications/books/history-outline.html>

“A chronological look at how the United States took shape. Published by the Department of State’s Office of International Information Programs, this fully illustrated edition was completely revised and updated by Professor Alonzo L. Hamby in November 2005.

人口・統計

Diversity Bibliography

http://poynter.org/content/content_view.asp?id=1187&sid=5

Offered by the Poynter Institute, a nonprofit organization “dedicated to teaching and inspiring journalists and media leaders,” this bibliography, updated in early 2005, links to online resources, including organizations and reports, and contains a list of books about diversity and the media.

Local Legacies: Celebrating Community Roots

<http://www.loc.gov/folklife/roots/>

From the Library of Congress’s Folklife Center, this site contains photographs, written reports, sound and video recordings, newspaper clippings, posters, and other materials that document nearly 1,300 Local Legacies projects throughout the country. These collections demonstrate the “creative arts, crafts, and customs representing traditional community life; signature events such as festivals and parades; how communities observe local and national historical events; and the occupations that define a community’s life.”

Pluralism Project

<http://www.pluralism.org/>

The Pluralism Project: World Religions in America is a decade-long research project, “to engage students in studying the new religious diversity in the United States,” with particular emphasis on “the communities and religious traditions of Asia and the Middle East.” Materials on the site include scholarly articles and research reports, publications, and a searchable database of religious diversity news. “Resources by Tradition” includes directories and profiles of religious centers, news, links, and statistics, covering religious traditions from Afro-Caribbean to Zoroastrianism.

Population Reference Bureau (PRB)

<http://www.prb.org>

The goal of the Population Reference Bureau is to provide information on U.S. and international population trends and their implications. Useful publications include the quarterly *Population Bulletin*, the *Population Handbook*, *Reports on America*, and the recent *The American People* series. Searchable and browsable, the site includes a glossary and data sheets and is also available in Spanish and French.

State and County QuickFacts

<http://quickfacts.census.gov/qfd/>

The Census Bureau offers “quick, easy access to facts about people, business, and geography” at the national, state, and county levels on this site. Searchable by geographic region.

StateMaster.com

<http://www.statemaster.com/index.php>

Using statistics compiled for various primary sources such as the U.S. Census Bureau, the FBI, and the National Center for Education Statistics, StateMaster combines them in a user-friendly graphical format designed for students, teachers, and librarians. The database allows you to research and compare a wealth of data on U.S. states.

Statistical Abstract

<http://www.census.gov/compendia/statab/>

The National Data Book from the U.S. Census Bureau contains a comprehensive collection of statistics on social and economic conditions in the United States as well as selected international data. It also provides a guide to sources of other data from the Census Bureau, other federal agencies, and private organizations.

U.S. Census Bureau

<http://www.census.gov/>

The mother lode of U.S. demographic data, this site includes statistics on population, housing, business and manufacturing activity, international trade, farming, and state and local governments. A few interesting features include the current Pop Clock, which gives up-to-the-minute population figures; multimedia services; the subject-oriented Facts for Features and the American FactFinder. The Census Bureau is also a resource for maps and other cartographic materials.

旅行

America's Byways

<http://byways.org/>

The National Scenic Byways Program, part of the U.S. Department of Transportation, Federal Highway Administration, was established "to help recognize, preserve and enhance" nearly 1,500 state and nationally designated byway projects. The site offers trip ideas, trip planners, travel information, and links.

Arizona Highways Magazine

<http://www.arizonahighways.com/>

Published by the Arizona Department of Transportation, the online version of this 80-year-old magazine contains exclusive features in addition to the articles on events, travel, hikes, and native plants and animals. The photography section features virtual tours and photo essays with full-color images taken by "many of America's best photographers." Links and maps are provided as well. This is but one example of the sites provided by the 50 states to assist travelers.

DiscoverOurTown.com

<http://www.discoverourtown.com/>

Brief listings and links to tourist information for selected cities throughout the United States are provided on this site. Information listed includes attractions, museums, lodging, dining, specialty shopping, and recreation. To access the information, click on a map or select a state.

MapQuest

<http://www.mapquest.com/>

MapQuest is one of several online services that help you map and find directions to locations throughout the United States. In addition to door-to-door directions, maps, and mileage, this interactive atlas contains trip-planning information such as city data, hotels, restaurants, attractions, and weather.

National Park Service

<http://www.nps.gov/>

This government Web site provides links to all U.S. national parks searchable by topic (historic sites, geysers, mountains, etc.) or by geographic location within the United States. Natural, historical, and cultural resources in the parks are featured as well.

Rand McNally

<http://www.randmcnally.com/>

A user-friendly interface leads you to free maps and route planning with detailed driving directions for the U.S. and Canada. Links to lists of hotels and nearby activities are also provided. Free registration allows you to save trip plans and addresses, though other site features require paid membership or lead to references to Rand's print atlases.

Recreation.gov

<http://www.recreation.gov/>

This site has links to information about several thousand federally owned or affiliated recreation areas. Entries include contact and weather information, directions, links, and available recreational activities (hiking, fishing, boating, cultural activities, camping). The site is searchable and browsable by keyword, site name, state, and activity. Once you locate a recreation area, you can view it and customize a map of the area.

Road Trip USA

<http://www.roadtripusa.com/>

"Follow route numbers or names to access driving tours along more than 30,000 miles of classic blacktop. Lively mile-by-mile descriptions celebrate kitsch oddities, local history, and apple-pie diners distributed over 10 yards of clickable image maps." In addition to the 11 routes described by author Jamie Jensen, the site includes a blog, a driver's almanac that explores a different location each month, a contest, and links.

Roadside Peek

<http://www.roadsidepeek.com/>

This searchable site offers a photographic tour of mid-20th century roadside architecture, profiling styles such as Tiki, Roadside Vernacular, and Neon. Route 66 landmarks are accorded a special section. Coffee shops and eateries, drive-in theaters, bowling alleys, motels, signage, and automobiles are featured as well as a daily news update and links.

See America

<http://www.seeamerica.org/>

Developed by the Travel Industry Association of America (TIA) in partnership with other travel industry organizations, this online portal includes "more than 10,000 links to hotels, airlines, attractions, convention and visitor bureaus, state tourism offices," and other resources. Available in Spanish, German, Portuguese, and Japanese.

U.S. Department of State: Bureau of Consular Affairs

http://travel.state.gov/visa/temp/temp_1305.html

This State Department site offers information to temporary visitors to the United States. It includes details about visas.

米国国務省は、上記資料の内容・入手可能性について一切の責任を負わない。インターネットリンクは、2012年1月現在、すべて有効であった。

米国大使館 / アメリカンセンター
レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821 札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内
Tel: 011-641-3444
Fax: 011-641-0911

米国大使館レファレンス資料室
〒107-8420 東京都港区赤坂1-10-5
Tel: 03-3224-5292 (レファレンスサービス)
Tel: 03-3224-5293 (来館予約)
Fax: 03-3505-4769

名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル6階
Tel: 052-581-8641
Fax: 052-561-7215

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543 大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル6階
Tel: 06-6315-5970
Fax: 06-6315-5980

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒810-0001 福岡市中央区天神2-2-67 ソラリア・パークサイドビル8階
Tel: 092-733-0246
Fax: 092-716-6152

米国大使館のウェブサイト

米国大使館 <http://japanese.japan.usembassy.gov>

米国大使館携帯サイト <http://usembassy.jp/>